

説教の秘訣

特 61

97

説教の秘訣

48. 10. 31  
内装

## 緒言

一 輒近我教界に於いて著述の最も饒きを占むるは、布教に資すべき勸鈔談録なりとす。試に之を繙くに、舊式法談あり、新案説教あり、高尚なるあり、卑近なるあり。其他材料の如き、陳腐なるもの、嶄新なるもの、千種萬類、玉石混交、初心は却つて其多きに苦み、取捨に迷ふの觀あり。而して談録の種類斯の如く多しといへども、概ね説教の形式に非ざれば所謂材料なる者にして、未だ系統的に初學を訓練するの著書あるを見ず。たま〜一二の書ありといへ

ども、簡に失せざれば煩に過ぐ。故に達者は取つて以て我彙中の寶とすれども、未達者は机上徒に寶を積んで、之を用ゆるの術を知らず。謂ふべし初心の爲め未だ婆心を缺けるものなりと。予聊か茲に見る所ありて、初心の爲め實地活用の方法を講じ、この缺點を補はんと欲す。是れ本書を出し、所以也。

一 近年青年の僧侶、世運の進歩につれ、概ね學問には心掛けるも、最も必要なる説教は、言を左右に托し餘り望まぬ傾きあり。本分を忘れたるの甚しきものと謂ふべし。元來僧侶の學問をなすは何んの爲めか

自から信ずる所を他に教へ、大法を宣布する外ならず。畢竟學問も教導の方便といふべし。學問しながら説教を修練せざるは、田を耕して米を望まざると一般、愚の甚しきものなり。西洋の宗教家僧侶といへば、皆説教に巧みにして、僧侶の説教と俳優の口調とは、其儘速記して是を新聞雜誌に掲ぐるに、一字一點も文法に違はぬといふほどなるのみならず、發音なども、僧侶と俳優とが定むる程の習ひなるよし、この外西洋には辨舌博士といふありて、そのなす所ろは卑近なる様なれども、他の哲學理學等の博

士の如く尊崇せらるゝといふ。特に慈善の事業は大  
 半僧侶の辯舌を借りて仕遂げらるゝものにて、その  
 場合には、高僧一席の説教は、何萬弗の價となるこ  
 かや。かくありてこそ僧侶も尊崇せらるゝなれ。今  
 や世運漸く一轉して、青年僧侶亦た説教の必要を感  
 じ、實地速成の方法を渴望するものなきにあらざる  
 も、之れを得るの機會なきを奈何せん。本書は聊か  
 其要求に應じて、獨習練習實地速成の方法を講じ、  
 初心をして其目的を達せしめんとす。是れ則ち初心  
 誘掖の指南針にして、敢へて大方識者の爲にせざる

也。

一頃日余が草廬を叩き、説教につき實地練習を請ふ者  
 數人あり。余の非才斯道に於いて素養なし。且つ寺  
 務の爲め少閑なきを以て之を辭す。請ふ者いはく、  
 然らば一部の書を著して與へよと。余辭して云く、  
 近世説教には説教學といへる専門の一科ありて、論  
 理學修辭學を基礎として、心理學哲學等をも修めざ  
 れば、眞の説教家と稱すべからず。余の淺學、豈敢  
 へて當らんやと。請ふ者復た云ふ、さらば初心のた  
 め、説教初步ともいふべき者を書して與へよと強ひ

て止まず。爰に於いて婆心禁ずる能はず。自から描らす筆を執るに至る。然れども別に新案名説あるにあらず。たゞ諸書の説を拔萃し、先輩の言を借り、聊か自己の經驗を加へて、之を秩序的に叙列し、其責を塞ぐのみ。縦ひ識者の嗤笑を招くも、聊か初心に資するあらば、功過相ひ償ふに足らんか。

明治四十三年七月

編者識

# 説教の秘訣

## 目次

### 第一章 練習の注意

#### 第一節 精神の修養……………一

- 一 信念の修養……………二
- 二 思想の向上……………三
- 三 心理の活用……………四
- 四 説教三昧……………五
- 五 高座上の注意……………五

#### 第二節 言語の練磨……………三

- 一 聖教熟讀……………二
- 二 平生の談話……………三
- 三 家人の對話……………四
- 四 他人の説教……………五
- 五 音聲の獨習……………五

#### 第三節 態度の注意……………二四

- 一 平生の態度……………二 出仕の姿勢……………三 高座上の威儀……………四 視線の注意
- 五 説教の服装

## 第二章 説教の基礎

### 第一節 音聲の練磨……………三

- 一 學者風の考……………二 説教専門家の説……………三 予が實驗談

### 第二節 辯舌の習練……………四

- 一 言語の使用法……………二 正則——語色法十一種——形容法……………三 比喻法
- 對句法……………四 疊字法……………五 進級法……………六 設問法……………七 循環法……………八 寓言法……………九 駢語法……………十 寫音法……………十一 隱現法……………十二 言語の八調格……………十三 露骨格……………十四 瘡哀格……………十五 平易格……………十六 單素格……………十七 周密格……………十八 華麗格……………十九 雄烈格……………二十 滑稽格……………二十一 變則……………二十二 昔の練磨法の例四則

### 第三節 才智の修養……………六

- 一 天才の有無……………二 趣向を立つる才智……………三 一致、順序、進取……………四 時機を知るの才智

### 第四節 學問の程度……………六

- 一 學問の必要……………二 普通學……………三 専門學

## 第三章 説教の組織法

### 第一節 組織の形式……………八

- 一 組織法の必要……………二 三分式……………三 序分の八則三法……………四 注意すべき要件
- 正宗分三格……………五 流通分二の心得……………六 四部式……………七 譬喩を用ゆる理由……………八 譬喩の撰擇法……………九 譬喩の五格……………十 因縁の撰擇法……………十一 五段式……………十二 變則式

### 第二節 讀題の區別……………一〇

- 一 連續題……………二 亂讀題……………三 一文の見渡し、一句の見込み、一字の

見立て

第三節 腹稿の注意……………一〇九

一 全分の草稿……………二 略腹稿……………導附け

第四節 説教の二大區別……………一一三

大堂向きに小堂向き……………論說的雜報的……………大名の道中と紙屑買ひ

第五節 聴衆の機類……………一二六

一 信者……………二 學者……………三 愚人……………四 誹謗者……………四種一席の場合

第六節 注意數件……………一三〇

一 引文の心得……………二 説教の席數……………三 參考書の撰擇……………四 大堂の音聲

### 第四章 説教の例題

第一 三分式 二席……………一三一

四

第二 四部式 二席……………一四二  
第三 五段式 一席……………一五七  
第四 變則式 一席……………一七二

### 第五章 説教の階段

段道十段……………一八〇

初段 初入未得位……………一八三

二段 辯舌練磨位……………一八七

三段 唯辯無法位……………一九二

四段 辯舌選擇位……………一九六

五段 好惡不定位……………一九六

五



六段 自心爲本位…………… 101

七段 自心入衆位…………… 104

八段 自語多材位…………… 111

九段 自心分別位…………… 114

十段 任運自在位…………… 119

附記 段外的一段…………… 123

### 附 録

一 香山院師法談規則…………… 1

二 深厚師勸化心得…………… 11

三 實信院師說導方規…………… 13

四 二則七病五位…………… 14

五 吉藏氏說教心得十四ヶ條…………… 10

## 説教の秘訣 目次終

# 説教の秘訣

大須賀順意述

## 第一章 練習の注意

### 第一節 精神の修養

凡そ説教には、言語と態度の注意、その必要なることは云ふまでもなし。されど言語と態度とは、元意業の發動なれば、第一に注意すべきは精神の修

養にあり、故に今精神より言語態度と次第して、先づ布教家の最も注意すべき要件を畧述せん。

一 信念の修養

説教の目的たるや、要するに自己の信ずる所を以て。他をして同じく之を信ぜしむるにあり、故に先づ第一に修養すべきは、自己の信念にあり。既に蓮如上人は「信もなくて人に信をこられよくと申すは、わが物もたずして、人に物をこらすべきといふの心なり、人承引あるべからず」と。誠められたり

これにて自己信念の必要なること知るべし。若し説教者其人にして信念なき時は、如何に其説は巧みに其言は美しくとも、到底教導の目的は達すべからず初學者説教家たらんと欲せば、先づ第一に信念の修養に努むべし、而して其修養の良法如何にと言はゞ説教を爲しつゝ、多く眞の信者に接するに如くはなし有難き信者に日夜接するは是れ同行善知識に親近する者にして、まさに自己信念の修養學校と心得べしこの心掛けなくんば、説教は一種の技藝に止まり如

何に努むとも恐らく徒勞に歸せん。

## 二 思想の向上

言説は是れ思想の發表なるが故に、その人の思想卑劣なれば、その説教も亦野鄙なり。故に布教家は思想の高潔ならんことを要す。思想にして高潔ならんか、人格自から高し。人格高からんか、風采自から擧る、之れ説教家たるの資格なり。由來雄辯の根本基礎は、たゞ人格にあり。世に人を動かす、人を感ぜしむる、何物か人格の上に出るものあらんや。

今説教は、無上の大法を宣布し、如來の御代官を以て自ら任ずるものなれば、たゞに人を感じしむるに止らず、進んで信を生ぜしめんことを要す。如何に其辯水の如く、其辭花の如くなりとも、其思想たるや陋劣に、其人格野鄙ならば、誰ありてか其人の言を信ぜんや、故に思想の向上、人格の養成、最も必要なりと謂ふべし

## 三 心理の活用

人誰か智情意の三を具せざるものあらんや。説教

は心理學の應用のみ。故に能くこの學理を實地に活用して、人に向つて法を説く、行くこして人氣に投ぜざるはなし。然るに初學たゞ談録のみを見て、名談家たらんと欲す。其本をしらずして、其末をこれ勉む。昇達せざるもむべなるかな。初學の徒、この心理の活用に就いて、常に工夫すること怠らずんば得る所ろ必ず多からん。

四 説教三昧

初學名談家となりて、一機軸を出さんご欲せば、

説教三昧に入るべし『説法式要集』に云く『説法は常に心中に捨つべからず、或は依報正報、或は有情非情、すべて萬象森羅、其見聞する事々物々、皆説法の攝屬とするにたへたり、敗鼓の革に至るまで、皆以て貯ふるは名醫の家なり』と。されば有名なる説教者は、常に眼前百般のことに氣をつけて、事々物々これを以て信仰を起さしむるに適當なる材料となし、譬喩なぞも一々手控へをなし、寤寐に之を忘れず、天地萬物悉くこれ眞如法性の發現、一事一物

も心をつければ説教の材料とならぬものなし。米國にて有名なる雄辯家ウェブストルといへる人は、日常のここに注意して、優美なる譬喩の心に浮びし時は、兩三年の間幾度かこれを思ひ返し、思ひ返してはしばく之を修正して後、初めて用ひたりといふ世上の藝能すらも、一時は癡者狂者と云はるゝまでに熱心せざれば、成功はなしがたし。況や今無上の大法を説いて、人心に深き感動を與へんとするに於いてをや。

五 高座上の注意

一たび高座に登りなば、萬縁を抛擲して、虚心坦懐ならんことを要す。須らく一切の動念を拂ひ去つて、苟めにも邪念に心を攪され、俗慮に思ひを奪はるべからず。佛も説法せんとする時、先づ寂定三昧に入らせ給ひけりこかや、宜しく沈毅自ら持して、精神の静まれること底ひなき深淵の風に騷がざるが如く、一靜能く百動を制すべきものなるべからず。

それには平生の修養こそ最も大切なれ、日常の起

居動作、勉めて輕躁なる振舞を避けて、自ら身に貫  
 目の具はるやうに心懸けざるべからず。一劍客あり  
 其頃名高き某説教者の、高座に登れるを窺ひけるに  
 打込むべき一點の隙をも見出すこと能はず、大いに  
 感嘆したりけりこそ。これ即ち説教三昧に由れる深  
 き修養の致せる所にして、これを説教禪とは名づく  
 べし。是れ初學の直に到り易からざる所なり。雖も  
 先づ高座に登るべき日は、朝より氣を攝し思ひを鎮  
 め、殊に其前一時間は、法衣を着し袈裟をかけ、能

く威儀を整へて、端坐冥想するを要すべき也。  
 身一たび教壇に上れば、是れ如來の御代官を申し  
 つる也。身は大法の宣傳者也。説く所は無上の大法  
 也。厭まで大膽にして、少しも、怯る所あるべから  
 ず、特に席に列れる聴衆、其數少なからざるに、彼  
 等が後生の一大事、全くこの一席によりて、永劫の  
 浮沈の岐る、所ご思へば、自ら一心になりて、全力  
 は此に傾注せらるべき也。昔、香樹院徳龍師、出で  
 越後に教誨するや、福順寺圓輪、副使として前席

の法話を勤む。然るに説教中途にして、言路急に亂れ、言葉もしごろもごろこなりて、遽に下壇す。香樹院、室に迎へて其故を問ふ。福順寺曰く「本山へ上納の五百金、座敷の床の間へ置けるまゝ、取收めず、忘れて高座に出でぬ、然るに説教の中途、フト思ひ出し、盗まれはせぬかと案ぜられ、爲に半ばにして壇を下れり」と。香樹院忿然として曰く「今日より副使を禁ず、直に去るべし、汝、僅かな金子の爲に、門末後生の一大事を忘るゝとは何事ぞや、己

後隨行を許さず」と、福順寺惶懼して罪を謝すれど容易に解かず、陳謝之を久しうして、僅かに赦されたりと。苟も布教を以て任ずるもの、斯の如く、聽衆の永劫の浮沈己が双肩に懸れりと思ひなば、自重の心も自ら加り、輕佻ならんご欲するも、輕佻なるこそ能はざる也。

第二節 言語の練磨

一 聖教熟讀

『三部經』『七祖聖教』『御本書』『御自釋』『畧文類』及



び「御假名聖教」等は布教者たるもの、一日もその机上を離すべからず、毎日日課として之を拜讀する時は、いつか其理心に染み、其義神に薰じて、必ずや殷仲湛が「三日道德經を讀まざれば舌本の間だ強きことを覺ゆ」の域に至らん。斯の如くなれば又説教の讚題及び引文なども自ら思ひ浮び、説教の口調も知らずく、聖教の文句に契ふに至る、蓮如上人は、「聖教はよみやぶれ」このたまひ、又「聖教をばくれく」と仰せられ候、又百返これをみれば義理おの

づからあらはるご申すこともあればこゝろをこゞむべきことなり、聖教は句面の如くこゝろうべし、その上にて師傅口業はあるべきなり』と仰せられしこと、布教に志す者、謹みて服膺すべきなり。

## 二 平生の談話

平生談話の時、高座に在るの思ひに住し、其態度其言語、すべて説教の修練と心得べし。日常世俗の用談皆な是れ因縁談と心得なば、人生は誠に好個の説教學校とはなるべし。況や同行に接する談話は、

直ちに説教の試験場と思はざるべからず。先覺云く「練習上の注意は、全く平常の談話にあり、説教師たるもの、平常の談話を疎かにせば、一朝教壇に登れる時知らず識らず其癖が出で、容易に改むること難し。何事も用意は其平生にあるものなれば、布教者たるもの、日常の談話に最も注意せざるべからず」  
こゝ誰にても此用意さへあらば、説教の練習は随時隨處に之を爲すを得べき也。

### 三 家人の對話

日常家人に對する談話是れ亦尤も注意すべし。一辭一言苟くもせず、言々深切を表し感動を與へんことに努むべし。但し家人は唯言語のみにては感じがたし。故に日頃已の素行に就ては且暮に深く之を注意せざるべからず。克く言行一致を以て之を試みる時は、初めは其効見ぬざれども、日々注意を怠らざれば、後には必ず耳を傾けて謹聽するに至るべし。若も家人をして我説教を聽くを樂み、聞いて落涙するに至らしめなば乃ち天下を横行すべし。

四 他人の説教

他の説教は巧拙共に聞くべし、特に名家の説教は百里を遠しとせずして、必ず行いて之を聴くべし。説教の呼吸は筆舌を以て傳ふべきものに非ず、故に先づ高座上の態度、讚題の音聲、譬喩因縁の用ひ方抑揚頓挫等、一席の結末迄よく注意して謹聽すべし、又拙劣なる法談も、之を聴いて、其不足なる所を知り、取て我が缺點とすべき所を覺るべし。他山の石も取て以て我玉を攻くべきにあらずや『説法

式要集』云く『説教不堪の人、講談の席を開く時、是亦往いて聽聞し、輕賤誹笑すべからず。言語辨才の不足、引文譬喩の不合、安心起行の可否等を聞き得て、已れ説法の時、是の如き事を誠覺して、取捨進退已に他の聴きを悦ばしめ、心を洗ひ、耳を清めんご思念すべし。然らば他師の説教、好惡共に悉く是れ我師也。三人行ひつる時んば必ず我師あり』といへり。

五 音聲の獨習

説教には音聲ほご大切なるはなし。いかな高論卓説も、音聲低く弱くして、聴衆の耳に徹底せざれば何の所詮もなかるべし。殊に初學は、音聲の低きものなれば、恒に高山河海、人なきの所に於いて、大聲を發して練磨すべし。これ一は肺胃を強健ならしめ、一は音聲を強壯ならしめ、一は言語自由ならしめ、一は胸襟を快濶ならしむべし。昔、京都の人園久兵衛、世々散樂の謠を業とす。其子源助、技極めて拙し、父怒りて曰く「汝は家を繼ぐべき者に非ず

宜しく好む所の業を爲し、其身の生計を爲すべし』さて、之を逐ひ出せり。時に其弟子なる備前の人之を憐み、連れ歸りて家に養ふ。源助徒然の餘り時々近邊の佛寺に遊ぶ。寺内に瀑布あり、水勢急にして聲巖に激し溪に響く。源助見て深く思ふ所あり、其後日毎に瀑布の下に至り、坐して謠ふ。されど唯瀑布の響喧しきを聴くのみ。斯くて數日を経るに、歌聲愈幽かに瀑音愈々高し。源助屈せずして月を重ぬ聲稍開けて歌能く我耳に入る、然れども瀑音尙高し

動もすれば其曲節を亂さる。源助益々精神を鼓し、  
 數月を経るに及び、聲愈々開け、謠聲と瀑音と自ら  
 分明なり。源助心に悦び、勉めて怠らず、三年を経  
 るに及びては、毫も發聲の勞なくして、歌曲自ら妙  
 を得たり。源助思へらく「や、神に入れり、以て家  
 聲を繼ぐに足る」と、主人に乞ひ、京に歸り、父の  
 家に入る、久兵衛我子の聲を聞き、走つて出で迎へ  
 入りて直に一曲を命ず、源助其意に従ひて謠ふに、  
 聲音清亮にして、曲調律に合ふ、僕婢みな感聽す。

久兵衛手を拍ちて喜びて曰く「汝が謠は吾に優れり  
 汝必大に家聲を擧げん、今より家を譲り、業を繼が  
 しむべし」と、源助駭き辭すれども聽かず、遂に家  
 を繼ぐ、これより従ふ者益々加はり、果して大に家  
 聲を揚ぐ、後剃髮して祐三と稱しけるこそぞ、其他熱  
 心家は一室の中にて鏡に對して修練し上達せし者あ  
 り。又西洋にては演説せんとする前數回、海岸に出  
 で演習せし者ありしといふ。詳しくは次の第二章に  
 至つて述ぶべし。

### 第三節 態度の注意

#### 一 平生の態度

平素の操行は勿論、時にその態度姿勢に注意すべし。居常俗形をなしながら、高座上改めて僧形をなす者あれど、恐らくは猿猴にして冠するに似たるべし。見よ、世俗の俳優すら、平素の動作に注意し、女形は起居動靜常に女態をなすこかや。輓近、鬚髪を蓄へ高座に昇る者あり、其人の説を聞くに時勢上多少其理由あるもの、如し。然れども將來はいざし

らず、今日の時勢としては、軍隊布教監獄教誨の如き特殊の場合を除くの外、説教家たる者は、なるべく僧侶らしくありたきものなり。古徳曰く「説教家たらん者、一週間に一度は必ず剃髪すべく、本堂の掃除も必ず所化に任せず、毎朝必ず自身になすべし香華燈明も十分に注意して、居間にてても白衣腰衣を着すべし。外出の時も如法篤實なる服装あらまほしきことなり」こゝ、是れ些事に似たりといへども、用意周到、初學の箴言といふべし。

二 出仕の姿勢

高座の昇降に就いては、別に口授あるべしこいへ  
ごも、その姿勢沈着にして悠揚逼らざるの風あるべ  
し。有人云く『肩で風を切り、袈裟衣をひらめかし  
反り身になりて、俳優の花道に出でたる様なるは、  
未だ一語を聞かざるに、已に聴衆の嫌悪を招くべし  
さればこてこそくご足早に見すばらしきもいかゞ  
宜しく沈重の態度を取り、風姿暢達なるべし。殊に  
本尊崇敬の念動作に顯はれ、眉目柔和なるようあり

たし』と、適切なる至言と謂ふべし。

三 高座上の威儀

その高座に昇りては、袈裟衣の威儀を正すに、餘  
り長々したるもいやみなり。さればこて昇るや否や  
直に讚題を出すもまた輕卒に見ゆ、宜しく稱名數聲  
威儀を調へ座を定め、能く呼吸を測りて、始めより  
間の抜けざるやう加減すべし。劈頭聴衆の氣合ひを  
失せば、恐らく竟に取纏め難かるべし。又正面の一  
方のみ見詰めて辯ずるも木像じみたり、さればこて

三方を見廻し首を振り立てたるも見苦し。また膝に置きたる手に力を入れて、肩を聳やし、威氣張る如きもいかゞ。手は靜に膝の上に置き、いかにも佛祖の御代官らしくすべし。演説の時の如く、手を振り立て、中啓を振りなごせば、恐らく野卑に陥らん。殊に眼を光らし口を横にするが如きは論外なり。但し時宜によりては、折々辯の廻し方によりて、自ら首を振る位のごときは、却て説教の餘勢を助るの効あるべきなり。

四 視線の注意

『説法式要集』に曰く「説法の中に眼を指し、先づ左の大衆を見、次に右、次に向うを見るべし。此の如く目遣ひするごきんば聽衆策勵の力あり。自ら慚ちて欠伸睡昏を慎む者也。亦美少の女性の坐する方は、見るごご憚りあり。『憎きもの、法師の女を見る目根』と清少納言は書きたり。佛弟子孫陀利難陀は、前世の餘習に由りて、女人を見て目を放たざるの毀りあり、多少の時衆、堂中合りて目を聚めて



視、耳を攢めて聴く、導師はたゞ雙耳兩目也。常に  
 慎んで缺目を守るべし、胸中正しからざるごきんば  
 眸子眊しといへり。胸中正しきごきんば、神精明ら  
 かなり。心意若し財色の爲に奪はるゝごきんば、魂  
 識昏散して、義言誤まる、學者測量すべし』と。

五 説教の服装

説教の服装に就いて、近來華美を競ふの風あり、  
 餘りに立派過ぎたるは我慢勝他に見ゆ、驕奢を表す  
 るの嫌ひあり。去ればこて破れ衣に垢染みたる法衣

も、法を輕侮せらるゝに至るべし、過不及を見はか  
 らひ、その中庸を取り、見苦しからぬを度とすべし  
 但し衣の折目正しからず、威儀の調はざるは、深く  
 誡むべし、長短等其身に適ひ、脚首出でず、胸擴が  
 らぬ注意大切なり。

## 第二章 説教の基礎

### 第一節 音聲の練磨

#### 一 學者風の考

音聲の練磨につき、第一に起る問題は、神聖なる説教を爲すに、音聲は果して練磨すべきものなるか否やといふことなり、通常學者連の考ふる所にては人間には天稟の音聲あり、何ぞ練磨を要せんや。されば『説法式要鈔』に曰く『説法する者、美聲を造

りて巧みに音曲をなすに五失ありとす。一に美聲を要する爲めに自ら出る音曲に心を傾けて義理に及ばず。二に法を聞く者其美聲に耳を傾けて義理を辨へず。三に聲の上げ下げに心をこられて、自他ともに文句を失うて一場の遊戯に同じ。四に俗人聞いて伎者の如しと彼れ是れの誹りをなす。五に將來の世人もこれに習うて世俗の事行の如く、終には是れを恒の式の如くに云ひ傳ふるなり』と、之を以て知るべし、自然の音聲は肺肝より出る者にして、人を感ぜ

しむること深し。故造の音聲は咽喉より出る者にし  
て、如何に巧みなりとも、人を感じしむること淺し  
況や今日の時勢として、故ら藝人や役者の如き聲色  
を作し、以て人を感じしめんこと耻づべきの至りに  
して、吾人が厭くまでも排斥する所なりこ。

一 説教専門家の説

前説に反對するは、世の所謂説教家なり、曰く「斯  
の如き學者連の考へば、善は善なれども、これ門外  
漢の理屈に過ぎずして、全く實際に當て筈らざる素

人考へたるを免れず、何となれば大堂群參の中に於  
いて、一ヶ月或は二三ヶ月説教勤續する場合、性來  
の音聲にては決して續くべきものに非ず。況や年中  
説教する場合に於いてをや。故に先づ性來の音聲を  
破りて、一定不變の音聲となさざるべからず。其方  
法は、初め性來の音聲にて數十席の座を重ねるとき  
は、音聲疲れ且つ噎るゝこと必せり。この時堪へか  
ねて休養する者多し、是れ甚だ心得違ひなり。實は  
この時こそ音聲習練の好機會なれ、故に苦痛を忍ん

でなほ座を重ぬるときは、遂に性來の聲を離れて、一定不變の音聲を發するに至る。其後數十日休息するときは、また性來の音聲に戻るものなり。然る時はまた前の如く習練數回に及べば、遂に性來の音聲に戻るこそなきに至る。この音聲を以て試みんに、如何なる大堂にて唱道數ヶ月に及ぶも、決して疲れ且つ嘔るゝこそなし。思へや、若し性來の音聲にて數日若は數十日引受けたる説教の中途にて聲の嘔れたる時の苦痛を、よし其苦痛は恐ぶべしこそせんも、

爲に會所にも迷惑をかけ、聽衆を失望せしめ、布教の目的を達せざるは如何せん。故に苦痛を恐んで音聲の修練に努むるもの、豈故聲を好むものならんや蓋、止むを得ざればなりと。

三 予が實驗談

前二説を考るに、第一説は多く世の所謂學者連の唱うる所にして、第二説は多く説教専門家の主張する所なり。されどこの二説何れも極端に奔るの嫌ひあり、何こなれば、説教に於て音聲と思想とは、大

いに關係するものにて、常に相須ち相援けざるべからず、縦ひ平凡の事を云うても、音聲の抑揚一つにて、聴衆の感銘を深からしむることあり。又いかな名論卓説も、聲音の調子外れの爲めに、聴衆には少しも解らず、何等の効果なきこともあらん、故に聲音の習練亦缺くべからざるものなり、今茲に聊か予が實歴談を述べて、讀者の参考に供せん。予壯年の頃、初めて某國へ三ヶ月の豫約にて出張せしことあり。何れも大寺にして、特に群參なりき、最初四ヶ

寺迄は、無事勤續せしも、五ヶ寺目に至り、俄然音聲疲れ、且つ嘔れ切りて、小聲だも發する能はず。總身汗を搾りて發聲を試るも更に功なし。當時の苦痛今尙忘るゝ能はざる所なり。されど引受けたる説教なれば、遁げ還るべくもあらず、苦しさを忍び忍び勤めしに、不思議にも五六日の後微かに音聲の通ふあり、夫れより日を経るに従ひて、漸次大聲となり、豫定の通り遂行したりき。其後斯の如く嘔れては出で、嘔れては出ですること、前後數十回に及び

今日にては數ヶ月間勤續するも、決して噀る、憂ひなし。所謂求めずして得ることはこの事なるべし。されば初學の徒、故さらに賣談僧の聲色を習ひ、晒噀れ聲を出さずとも、練磨その功を積むに従ひ、出る聲は自然に出ることと思ふべし。

而して故意に音聲を破りて、法談聲となし、世俗の藝人に類するが如きは、最も厭ふべし。たゞ説教者は田舎の翁媪のみ對手とせば兎も角も、今後文明の世の中に、随分教育ある紳士淑女も座に列ること

なれば、苟めに野卑なるべからず、この點に於いて學者連の意見も時弊に中れる所ありで、慎んで傾聽すべし。既に七箇條の起請文には『念佛修行の道俗男女、卑劣のここばをもて、なまじるに法門をのべば、智者にわらはれ、愚人を迷はすべし』(改邪鈔)といへり、今の時、世の布教者たるもの、猛省せざるべけんや。

## 第二節 辯舌の習練

### 一 言語の使用法

説教に音聲の必要なること、已に前に述べたるが如し。然るに其音聲や清音雅調にして喋々辨ずるも言語の使用法を知らざれば、鵲噪蛙鳴に等しくして聽者に何等の感動をも與ふること能はざるべし。元來說教の主體とすべきは、その聲音よりは寧ろ言語にありといふべし。故にその習練を要すること一層必要なり。

さてこの辨舌の練習に就いては、正則と變則との二法あるべし、正則にて練習せんことせば、必ず修辭

學を修めざるべからず。併るにこの學は、一科の專門學にして、初心には容易の業に非ず、初心に對し最初より緻密なる法則を以て之を教へんか、却つて法に括られ其門に入りがたし。詩文にまれ、茶の湯生花にまれ、皆併らざるはなじ。故に別に變則を設けて初心をして容易に其門に入らしめ、漸次堂奥に登らしめんことす。されど今茲に修辭法の一斑を叙述して、他日専門に入るの階梯となさん。

二 正則

修辭法とは、言をきれいに、やさしく、うつくしく、はなやかにいひなし、又さういひやうに、をかしいやうに、言葉をあやなして、聴衆をして何さなく愉快の感を惹起さしめ、うれしく有り難く思はしむる法なり、さればこれを妙語又は艶辭といひ又は話色とも云ふべし、一口にいへば、凡俗の語法を殊更に違へて、語中に妙艶の興を添ゆるの術なり。之を巧みに使用する時は、啻に充分に意を通ずるのみならず、語辭に幾層の勢力を加へ、聴者の心胸を快

爽ならしむるを得べし。平常たゞ耳朶に慣染したる語句にては、聴者の耳に觸れて、感興を興ふること尠し、斯る場合には艶辭を用ひ妙語の力を假るを必要なる方法とす。今諸書の中より、實用に適せるものを蒐め、これを二項として畧述せん。

一項 語色法 十一種

一、形容法 物體の大小長短、事實の動作進退を形容するの法、例せば。

大きな男を「琵琶湖に足を漙たして富士山を枕



にする男』。

滑稽家を『一休和尚も三舎を避け』。

遊歴家を『六十餘州を股に掛け』と云ふの類

二、**比喩法** 事物両々比較せずして却つて之を同一

視するものを云ふ、例せば。

不幸を『泣いた顔を蜂が刺す』。

見識を『寧ろ鶏口となることも牛後となる勿れ』

三、**對句法** 反對の句を對置し以て両意の比較によ

つて意義を強くするの法、例せば。

因果を『積善の家には餘慶あり、積惡の門には

餘殃あり』と云ひ。

過誤を『弘法も筆の誤り、猿も木から落る』と

云の類。

四、**疊字法**、同じ字を二字づゝ重ね意味を剴切なら

しむるの法。

颯々、霏々、堂々、明々白々の類。

五、**進級法** 詞と語と句と段を順次排列するの法に

て最も弱き者最も小き者を初に置き、終りに至る

に從つて順次に強き者大なる者を並べ、又は意味に關せず語韻の短なる者を前に並べ、長なる者を後に置き、聽者の感覺を一步は一步より進まじむる法なり。

意味の強弱によりて歩を進むる例。

「予が宗教熱心の思想は、問はるゝも、詰らるゝも、駁せらるゝも、誦らるゝも、打たるゝも、縛せらるゝも、疵づけらるゝも、殺さるゝも、斷じて一步も退かざるなり」。

又語音の長短に由つて歩を進むる例。

「予が書齋はせまく、きたなく、うすぐらき所なり」の類。

何れの場合も音聲を一段々大きくして言ふべし。

六、設問法、意見を殊更に疑問體に明言し、聽衆の答を待つ者の如くするの法なり。例せば。

「佛は果して我々の心中を見ることは出來ますまいか」ご一分間も黙止して後に「佛は天眼通

ありて能く我々の心中を見るここが出来ます』  
 之を明解し、又は「見真大師は名利を好むの  
 人でありますか」ご置いて「藤原の門閥を捨て  
 た事」を語るの類。

七、循環法 始めに申し出せし語を、一歩々々論  
 及し、遂に始めの語に返るの法なり。例せば。

「凡そ人情なるものは、勝てば則ち驕り、驕れ  
 ば則ち狂る、狂るれば則ち怠り、怠れば則ち敗  
 る、敗るれば則ち懲る、懲るれば則ち勉む、勉

むれば則ち勝つ』の類。

八、寓言法 實跡なき事、或は夢物語を叙述し、暗  
 々裏に他の緊要的を含ましむるの法なり、明ら  
 さまに云ふを憚る風諫風刺等に用ゆ、是れは專  
 ら人々の氣轉に出づべき者なれば、例を示さず  
 九、罵詈雑言 公衆に知らしめんごするの主意を、故  
 意に逆説する法なり。例せば。

「君は小人なり悪人なり」ご云ふべきを「君は  
 孔子よりも釋迦よりも善人なり君子なり、一た

「君を知る者は皆驚て君を賞讃する」云の類  
 一〇、寫音法 物體より發する音響を、舌頭にて寫す法なり。例せば、

門戸を叩く音を寫してドンく、雷の聲を寫してゴロくバシく云ふの類。

一一、隱現法 其言んご欲する五六の點を托げて蔽隱し、たゞ其中の一點を明言するが如くし甚だしき感覺を與ふるの法なり。例せば、

外教者を破するに余は無暗みに耶蘇宣教者を駁

するを好まず、或人の如く、彼れが教育する女生徒に姦通して流産なさしめしが如き、一箇の不品行を喋々せず、又彼れが日本人洗禮の證據なりとて偽名妄判して、本國教會より日本人一名に付き貳拾弗の金額を貪り取るが如き醜行も更に之を論せず、予は只彼等が宗教者なりこの假面を冠りて亡國の密策を謀るの一點に向つて駁撃せざるを得ざるなり等の類。

二項 言語の八詞格

一、露骨格 單に人をして了解せしむるのみに止るの目的にして、一切の華飾を擯斥するの體なり、この體は宗意安心を懇説するに適す。

二、痛哀格 是も露骨格と同じく、他の耳朵を樂ましむるを勉めず、専ら情に迫り感に訴へて、他を涕泣せしむるの體なり。

三、平易格 又は穩和格とも名づく、是は露骨格の如く頑固ならず、又は華麗にも走らず、柔和を主として實體に吐露する中、自ら人をして厭忌せし

めざることを勉むるの體と云ふ。

四、單素格 周密の反對にて、簡單を主とし、他をして思想混雜の惑ひを生ぜしめざるの格なり。

五、周密體 主旨を充分ならしむる爲めに、種々の説明を爲し、幾多の例證を用ひて、叮嚀反覆、只他をして徹頭徹尾了解せしめんを吸々と勉むるの體なり。

六、華麗格 妙語に由て得らるべき丈けの美辭は悉く説き連ねて、燦然眼を奪ひ、論旨を廣大にする

の體なり。

七、雄烈格 言語殺氣を帯びて、半は強慢なるが如く、論旨を切迫ならしむるの體なり。

八、滑稽格 是に六法あり

- 一、重大なる事物を輕少に云い爲す者
- 二、輕少なる事物を重大に云ひ爲す者
- 三、我慢にして我慢ならざる者
- 四、事物の齟齬を云い爲す者
- 五、事物の當然を云爲す者

六、取り止めなき洒落を云者

この滑稽法は初心の中は漫りに用ゆべからず、熟達の上巧みに之を用ひざれば、法を輕侮せらるゝの虞れあり、故に今爰に詳説せず。

己上初學の爲め修辭法の一斑を畧述す、其全班を知らんと欲せば専門に入りて之を知るべし。

三 變則

變則にての言語練磨とは何ぞや、他なし、御聖教の中自己に感じたる御言とか、或は和歌俳句とか又

は諸大家の説教中巧妙なる言又は趣味ある言などは  
 悉く稜莖しおき、之を暗誦して、説教の中途或は結  
 末に用ゆるを云ふ。是等の言には必ず修辭法に契ひ  
 たる所多きが故に、知らずく言語聲調其法に契ひ  
 他日熟達するに及んで、大いに得る所多からん。今  
 試に其二三を記さん。

一、無常を語らんする時

『老少不定ノサカヒナレバ、サカリナルヒトモオ  
 ホクユク。生者必滅ノコトハリナレバ、老ヌルヒ

トハマシテトマラズ。鳥部山ノケブリミ子ニモ  
 ノボリ、フモトニモダツ。ワレモイツカソノカズ  
 ニイラン。アダシ野ノ露、アシタニモキエユフベ  
 ニモオツ。ダレトテモヨソニヤオモフベキ』等。

(「存覺法話」十三)

又た「風葉ノ身タモチガタク、草露ノイノチキエ  
 ヤスシ、南隣ニモ哭シ、北里ニモ哭ス。人ヲオク  
 ルナミダイマダツキズ、山下ニモソヒ原上ニモソ  
 フ。ホ子ヲウヅムルツチカハクコトナシ。イタマ

シキカナ。マノアタリコトバチマシヘシ芝蘭ノト  
 モ、イキト、マリヌレバトチクオクリ、アハレナ  
 ルカナ、マサシクチギリナムスビシ斷金ノムツビ  
 タマシ井サリヌレバヒトリカナシム』等（同上）

一、浄土の樂果を述んごする時

『西方世界ハ樂チウクルコトキハマリナシ、人天  
 交接シテフダツナガラアヒミルコトチウ。慈悲心  
 ニ薰ジテタガヒニ一子ノゴトシ。トモニ瑠璃ノ地  
 ノウヘニ經行シ、オナジク梅檀ノハヤシノアヒダ

ニ遊戯ス。宮殿ヨリ宮殿ニイタリ、林池ヨリ林池  
 ニイタルニ、モシシヅカナラントオモフトキハ、  
 風浪絃管チノヅカラミ、モトニヘタ、リ、乃至縁  
 チオヒテアヒサリ、カタリオハリテ子ガヒニシタ  
 カヒテトモニユク等（同上）

是等の類文枚擧に違あらず、但し俚耳に入り難  
 き難解の語は、豫て和譯し置きて暗誦すべし。  
 往昔の青年は、今日の如く修辭學もなく、且つ  
 著書に乏しき爲め、師に就いて薪水の勞を取り



言語練習の法としては、臨終捨命の辨ごか、極樂莊嚴の辨等を師より傳授し、之れに由て練磨研習せしものなり、今日より見れば笑ふに堪へたりご雖も、其苦心は懃察せざるべからず。今古書よりその二三を拔萃して参考に供すべし。

(一)

斯る御慈悲ご聞へたら、無明長夜の常闇も、明信佛智ご夜があけて、三界五道の憂き旅も、今は一夜の夢ごなり、何ん時命ち終らうごも、閉ぢる眼ごは

娑婆の名残り、開く眼ごは淨土の蓮臺、苦き藥りの替りには、口に味ふ百味の飯食、鼻には微妙の香を嗅ぎ、耳に聞くのは音楽管絃、見上る空は五色の雲見下す大地は瑠璃の玉、一足歩めば青蓮華、二足歩めば白蓮華、左を見れば八功德水、右を眺れば七寶樹林、金の枝には銀の葉がつき、瑠璃の花には珊瑚の菓、涅槃の岸を打つ波は、念佛念法念僧の音、鬘く紫雲の断々間より、鸚鵡舍利迦陵頻伽、共命の鳥五色の羽がいを揃へ立て、法藏因位の御苦勞を轉づ

るごある。参つた行者は過ぎし昔しを打ち忘れ、歡喜の泪せきあへず、泣いて喜ぶ仕合せは、今霄もしれぬ我身ぞこ、存ぜられたのであろうなら、廣大大悲の御重恩、頂き上げては南無阿彌陀佛。

(三)

斯く聽聞の上からは、裸で居ても正定聚、喰はずに居ても不退轉、寢て一夜を明すごも、大悲光明の懷ろなり。起て一日暮すごも、近よるものは安養淨土、臨終捨命の夕へには、合いの襖まをさらりごあ

け、奥の一間に入るよりも、まだく早い蓮華化生花の臺へ抱き上げられ、大悲の親に初對面、黄金の山を見るような、大悲の如來御手をのべ、参つた行者の頂きを撫て、善哉々々、汝ちを待つごこや、久し、ようこそ参つた待兼ねたご、御賞め下さるその時は、天に踊り地に躍り、歡喜の涙だ胸に迫り、泣いて喜ぶ仕合せは、遠い事ごは思ふなよ、追付け我身の仕合せぞこ、存ぜられたであらうなら、何を御縁ごしてなりごも、御恩の稱名勇ましく、喜び上げ

ては南無阿彌陀佛。

(三)

諸佛浄土の門口で、永不成佛と追ひ出され、必墮無間と札付けられ、死出の山路で首つるか、三途の川へ身を投げるか、仕よう模ようのないやつを、爲物大悲の親さまが、御慈悲の御手をのべたまひ、落ねばならぬ地獄なら、彌陀が落ても悪人女人、落しはせぬぞ引受けたこ、呼んで下さるこの御慈悲、知らぬ昔しは是非はない、聞けた今日の只今より、心

の端を改めて、御恩の程を身にこしみくこ、仰ぎ上げては南無阿彌陀佛。

(四)

今まで逃げたる私しを、逃したまわぬ彼尊の御慈悲、三従五障も障りにならず、助けて下さる彼尊の御慈悲、罪が重いと苦に病むな、消して下さる彼尊の御慈悲、信ずる一念待兼ねて、救うて下さる彼尊の御慈悲、口に稱ふる六字の御禮、是も廻向の彼尊の御慈悲、御慈悲々々々々喜ぶ事も、是も矢張り彼

尊の御慈悲。

是等の辨を暗記し、其辨じ方抑揚頓挫に至る迄、悉く師の口傳を受けて、辨舌練磨の方法を爲せし者なり。

### 第三節 才智の修養

#### 一 天才の有無

説教には才智を必要とす。然るに才智は天性にして、人によりて利鈍あり。性來才智ある者は、上達する事速かにして、談録を見たり、或は他の説教を

聽いて、直に一二席は談じ得るも、數日重ぬる時は大いに苦むこと必せり、是れ習練の足らざるが故なり。且つ何所にてても一時其責を塞ぐが故に、練磨を缺き小成に安んじて、終身一頭地を抜くこと能ざる者比々然り、豈に慨歎の至りならずや、又才智なき者は、他の説教を聽き、或は談録を熟讀し、充分思考して高座に上り、さて辨ずるに當りて、最初思考の三分の一も談ずること能はず、赤面して高座を下り、説教は難儀なるもの、容易ならぬもの、遂に放

棄するもの多し。是れ今書の出る止むを得ざるなり  
今才智修養に就いて聊か之を説明せん。

二 趣向を立つる才智

説教の趣向と云ふこと、元より天才にもよるべし  
と雖も、之が修養に就いては、亦正則變則の二法あ  
るべし。正則を以て修養せん欲せば、亦説教學に  
據りて、論理學修辭學を基るこし、心理學等を修め  
ざるべからず。是れ亦初心には甚だ困難のこことなり  
と云はざるべからず。然れども、單に説教の趣向と

いへば、大體説教の組織法に屬するもの故、初心と  
雖も必要の知識にして、深く注意を拂はざるべから  
ず。

彼の泰西の大家ノックス氏の『説教學』に、この  
組織法に就いて一致順序進取の三を説けるもの其要  
を得たりと謂ふべし。

(一) 一致といふは、前後の脈絡相通じて、其説教の  
根本主意に一致せしむることにして、この一致がな  
ければ到底説教の目的を達すること能はず、されば

さて同じことを繰り返してゆくが必ずしも一致とは謂ふべからず、種々な話しをなすつゝ、而も大主意に一致せしむることにして、一つの和歌を引くにつけても、聖教の文を引くにつけても、譬喩を用ゆるにつけても、因縁を話すにつけても、悉く同一主意に合同せしめざるべからず、然らざれば徒に支離滅裂に陥り、前にいふたことが何方へやら行つてしまひて、これを取纏めること出来ず、聴衆の胸中の一席の主意を徹底せしむること能はずして折角の説教が

何の役にも立たぬこととなるべし。

(二) 次に順序といふことは、説教中にて今云ひつゝある言は、恰も今之を言ふを言葉の秩序と爲すといふことにして、即ち凡ての言説は、能く其先後を考定せざるべからず、言説若し先後する所あれば、聴衆は之が爲めに混雑を生ずべし故に先づ聴衆の状況を考へて、其事情を洞察し、よく順序を追うてこれを説くをよこす。かくすれば自ら説明の混雑を避け、又説教に勢力を増すことを得べし。

(三) 進取しんしゆといふは、幾回いくわいの説教せつけうも其目的そのもくてきを一ひとにして次第しだいに言説げんせつを進すすむるにあり、此進取このしんしゆを心掛こころがけてをれば、言論げんろんが枝葉しやうに涉わたることなく、次第しだい／＼に話はなしを進すすめて、聴衆ちゆうしゆをして此次このつぎは／＼といふやうに喜よろこんで聴きかしむることを得うべし。斯かくすれば、言論げんろんに命脉めいみやくあり、又人心またにんしんを感動かんどうせしむるの利益りやくあるなり。斯かの如ごときは、固もとより容易やういならずとせんも、初心しんしんにして、この趣向しゆかうの才智さいちを修養しゆやうせんご欲ほつせば、努つとめて名家めいかの説教せつけうを聴きいて、その趣向しゆかうの巧たくみなる所ところは、其

場ばに於おいて之これを手記しゆきし、之これを思考しかうして自みづからも之これに倣ならひて辨べんずるにあり。昔むかしより

説教せつけうは聞き書きかけかたれ座ざをかさね

人ひとにたづねて、くせをなほせよ

といふを、説教せつけう習練しゅうれんの通則つうそくとせり、この『聞き書きかけかたれ』の通則つうそくを守まもり、この書しよの前後ぜんご各章かくしやうを熟讀じゆく玩わん味みして、孜し々しとして怠たらず、座席ざせきを累かさぬる時は、如何いかに鈍根どんこんの者ものと雖いへも、知しらず識しらず説教せつけうの組織そしき法ほふに通曉つうきやうし、自みづから趣向しゆかうにも巧たくみになるべし。斯かの如ごときは

是れ變則なる組織的知識の修養法なりと謂ふべし。

三 時機を知るの才智

この時機を知ること、説教に就いては要中の要なり。例へば我一家に於いても、長者に向ふと妻子に對するとは、自らその談話に差別あるが如く、大人に話す話を以て、小兒を感動せしむることは得べからず。智者と愚者、信者と無信者、男子と女子、都會と村落、海邊と山中、各その處その人に對して、その趣向なかるべからず、殊に注意すべきは説教の

長短なり。如何に名案の説教なりとも、晩景に及ぶ時、或は前後數人の説教ある場合には、長談は尤も慎むべし、又邊陲にて偶ま一席の説教ある場合、聽衆はゆるく、聽聞せんご渴望する時、短座にては渠等をして失望落膽せしむること必せり。是等の時機を知らずして、法を説んか、金玉の名案もその價值を失ふに至るべし。而してこの時機を知るの法他なし、たゞ座功を累ねて注意を怠らざるに在り

(次の第五章第五節参照)



### 第四節 學問の程度

#### 一 學問の必要

説教には學問の必要なることは言を待たず、學問淺き時は説教數十日に亘るとき、又は僧侶學者杯の多勢參詣の場合、大いに苦むものなり、説教は學問の應用なり。學問なきの説教は辨舌才智はありといへども、花ありて實なきが如し、又學問のみありて説教未熟なるは、幹ありて花なきが如し。故に花あり實あり、文質彬彬たらんことを欲せば、説教練磨

の傍に、常に學問を勉むべし。

眞宗の布教者に取りて、學問の道亦廣しと雖も、その大要二途あり、所謂普通と専門との二科なり。説教者能く此二科を學び、其中普通學を應用しては俗諦門を辯じ、専門學を應用しては眞諦門を談ずべし。

#### 二 普通學

説教者に取つて、特に普通學とすべきものを擧げんが。

一、心理學、倫理學、論理學、修辭學、物理學、  
 歴史、地理の諸科。

一、元亨釋書、本朝高僧傳等の史傳。

一、四書、蒙求、徒然草、平家物語等、和漢の諸典

一、漢詩、和歌、俳句の初步。

是等の學孰れも其専門に入りて悉く學ばんことは  
 固より容易の業に非るべし、然れども是等の著書は  
 書肆の店頭に溢るゝばかりなれば、日頃心掛けて涉  
 獵せんことは敢て難事に非るべし。

三 専門學

一、八宗綱要諸宗綱要の類。

一、古徳の法語隨筆の類。

一、眞宗漢和の諸聖教。

一、眞宗の歴史。

是等の學は、苟も眞宗の説教家たらんとするもの  
 は、必ず終身の學問として、之を研究せざるべから  
 ず。彼の基督教にても、宣教師は假令他事は知らず  
 とも、聖書だけは是非之を學ばざるべからざるもの

こなし、凡ての説教は聖書の眞理を説明するものなれば、能く之を熟覽し、前後に比較して其意味を考へ、暗記し得るまでになりて、説教中自由に之を引證せざるべからずといへり。況や吾等佛教徒たるもの、如來の大法を宣傳するに當り、更に聖教をも熟讀せず、文義をも考へず、偶ま之を引用することあるも、全く其意義を取違へ、又は文句の間違ふやうなことありては、折角の説教も更に價値なきものとなり了るべし。斯る輕はづみのことにて、いかでか

人の信仰を惹き起すことを得んや。故に説教家たるものは、よし普通學には疎しとせんも、通佛教の教相より特に本宗の教義に就いては、最も慎重の注意を拂ひ、常に之を研究せざるべからざる也。

### 第三章 説教の組織法

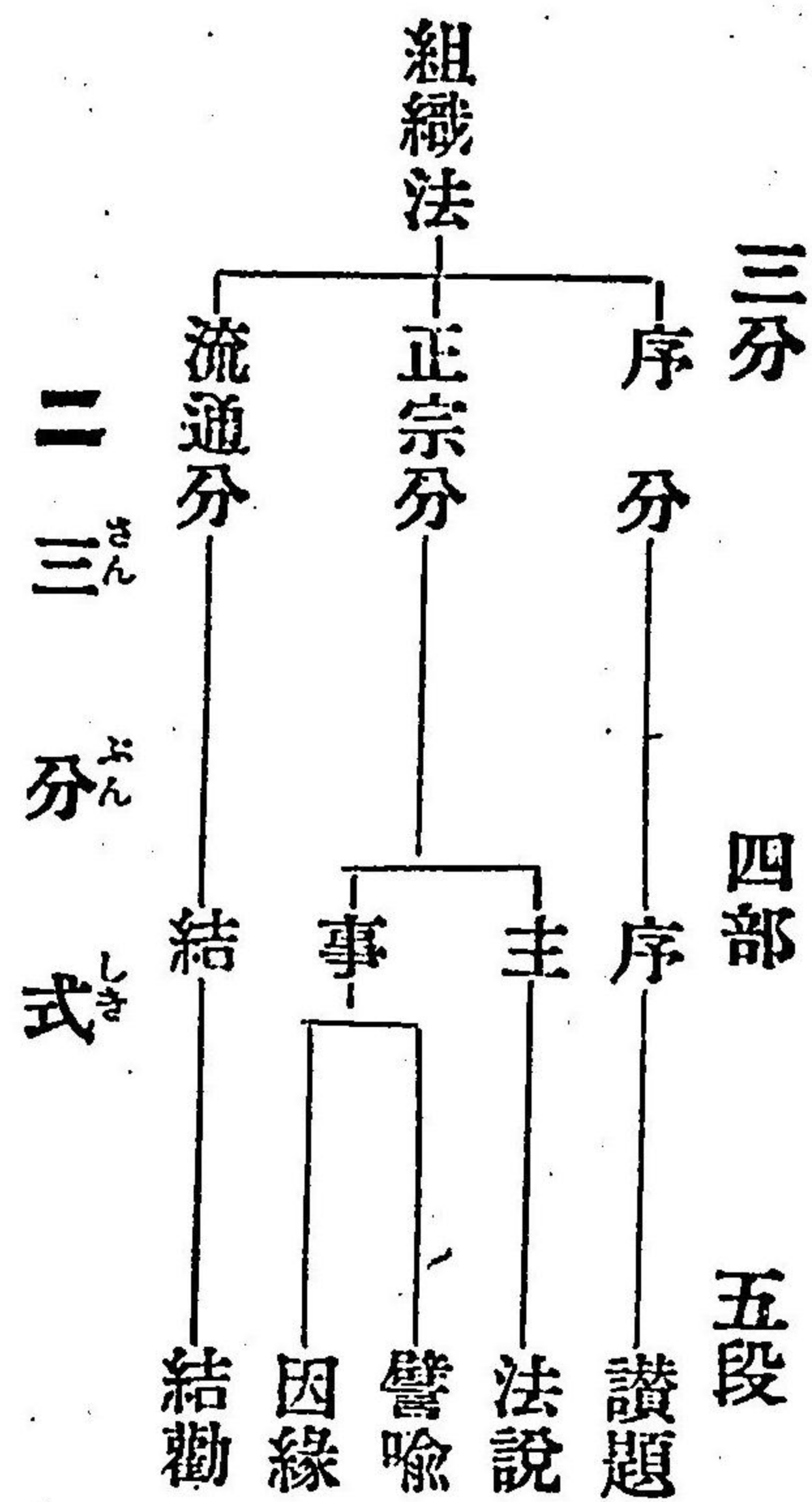
#### 第一節 組織の形式

##### 一 組織法の必要

上來の四節に陳べ來れる音聲、辯舌、才智、學問の四節は、これ説教の基礎にして、而もその骨髓也。苟も説教に志すもの、若し之を知らずして、その昇達を望まば、恐らく木に縁りて魚を求るむが如くならん。

されどこの音聲といひ、辯舌といひ、才智といひ又學問といひ、何れも是れ説教の材料となるべきものに過ぎず、宛も彼の家屋の材木のみにて建築せられず、別に建築法のなかるべからざるが如く、單に其材料のみにては未だ説教の出來あがりたるにあらず。是れ爰に組織法の一章ある所以なり。この組織法即ち組立法は、一席中の段落のここにして、この法を知らずして漫に説き出さば、如何に金玉の明案たりとも、前後錯亂して、支離滅裂徒勞に歸せん

のみ。故に今三分四部五段の組立法に據りて、逐次これを畧述せん。但しこの三式は。具畧開合の相違にして、敢て別物にあらず。たゞ初心進級の順序として三式とするのみ。



序正流通の三分は、もご佛經分科の名目にして、普通に冒頭本論結尾ともいふ。この三分は、他の書籍に據りて組立つべきものに非ず、思想の順序を組立つるもの故、初心は最初より複雑なる組立法を以て壇に昇る時は、却て順序を誤るの恐れあり。故に最初は譬喩因縁を省きて、單に讃題の主意を述るに止むべし。この三分にて自由に辯ぜらるゝに非れば、第二の四部式に移るべからず。今三分に就いて畧述せんか、世間日常の用談にも、皆この三分あり。初

め時候の挨拶の如きは序分にて、次にさて今日は斯くくくの用談にて云云は正宗分、用談済んで歸りの挨拶は流通分と云へし。

初に序分とは讃題の次に出すべきものにて、聴衆の耳を傾け注意を惹くこと特に厚し、注意せざるべからず。故に序に就いては種々の辨じ方あり。文章の起法八則を應用せば左の如し。

- 一、叙事 事實を叙して端を發く。
- 二、頌聖 聖者の言を引いて端を發く。

三、問答 各々何の爲に參聽ありました等。

四、原本 道理又事實の根本を尋ねて端を發く。

五、破題 古語或は世諺を引いて端を發く。

六、設事 假りに事實を設けて端を發く。

七、抒情 眞情を吐露するを云ふ。

八、歌誦 歌を引いて端を發く。

更に左の三法あり。

- 一、來意的 讃題の來意を述るを云ふ。
- 二、談話的 説教開席に及びたる事情等。

三、平叙的 讚題の意を畧述して正宗分に入るの類。

連日の説教に同じここにては、聴衆をして倦ましむるの恐れあり。故に右數頂の方法を取代へて使ふべきなり。

又序を説くに就いて注意すべき要件としては。

一、言語の沈靜なるを要す。

初めは言語を沈靜にして、聴衆をして耳を傾けしめ、次第に本論に入るのが説教の順序なり、初めか

ら輕浮なる調子では、聴くものをして輕侮の念を抱かしむ。

二、理屈を語る勿れ。

初めから理屈に流れては、聴衆そのために惱を費し、肝心の本論に入りて倦怠の情を惹き起すものなり。

三、修飾を用ゆる勿れ。

言語の修飾は、感情の昇るご共に出てこそ、人を感ぜしむるものなるに、壁頭第一に修飾を以て入つ

ては、本論の感興を失ふに至るべし。

四、冗長に渉る勿れ。

口上の長いのは何事につけても面白くなし、序説は成るべく簡單ならんことを要す。

次に正宗分とは即ち法説にして、正しく説教の大意眼目とも云ふべし。この法説にて讚題の意味を説き盡し、自己の信念を他に傳ふる主要なる一段もある、充分力を盡さざるべからず。假令序分流通分は拙劣なりとも、この正流分にして聴衆に信念を起さ

しめざれば、其説教は徒勞に歸すべし。

先輩の説に、この法説の組立に就いて三格ありとす。

一、綱領一段格 これは第一段に法説の大主意を辨じ、第二段に至つて譬喩并因縁を擧げ、第三段に至つて結勸の辭を爲すので、これを法説普通の順序とす。

二、鶴膝格 これは大主意を第二段に置きて、第一段若くは第三段に於いて譬喩因縁を擧ぐるも



のにして鶴の膝の如く中間の所に大主意あるなり。

三、曲折格　これは大主意を第一段第二段に置かず、初めには譬喩因縁を擧げて、第三段に大主意を置くもの。

尙この上小部分の組立法あり。

一、對照　これは佛教と基督教、若くは信者と未信者とを對照して、自説を明にするの法あり。

二、反覆　これは同じことを繰返すので『史記』

に『非常の人ありて而して後に非常の事あり非常の事ありて而して後非常の功あり』と云ふの類。

三、層進　これは次第々に論歩を進めて、聽衆をして自然に感興を惹かしむるの法なり。

後に流通分とは、即ち結勸終局の事にて、前段の主意を結んで、後の相續を奨勵するものなれば、決して輕視すべからず、この結勸力なき時は、所謂龍頭蛇尾の毀りを免るべからず。

この流通分に二つの心得あり、一席限りご引續きたる時ごなり。一席限りの時は充分力を盡して局を結ぶべし。次席のある場合には、聴衆をして其次はくご望ましむる爲めに、成る可く簡單なるを要す

三四部式

四部式とは序主事結の四段にして、又は序正補結とも名づくべし。序は前述の如し。主は主意主義にして、亦前の正宗分に同じ、事は事情事實にして、即ち譬喩因縁をいふ、三分の上にこの一部を加

ふ、是れ一步を進んだる式なり（但しこの式にては譬喩なり因縁なり其一を用ゆべし、其二共に辯ずるは尙進んで次の五段法によるべし）譬喩因縁の用ひ方に就ては、元より其人の技倆によりて巧拙あるべしといへども、三分式すら自由に辯ずること能はざるもの、何んぞ之を用ゆることを得んや。是れ三分式の上にこの四分式を置く所以なり。凡そ譬喩因縁を用ふるは何の爲かといふに。

一、法説を一層明白ならしめんため。

二、法説難解の所を容易に領解せしめんため。

三、法説のみにては乾燥無味なるが故、之を以て

感興を與へんがため。

右三點の中、譬喩は主として前の二點の功用あり

て、兼ては後の一點をも具することあり。因縁は主

として後の一點の功用ありて、兼て前の二點をも具

することあり。

一に譬喩を撰ぶに就き

一、成る可く手近い所のものを撰べ。

一、成る可く斬新なるものを撰べ。

一、成る可く簡明なるものを撰べ。

譬喩の五格

一、直喩 明かにその譬喩たることを示す。

二、隱喩 『心の海に波が立つ』とか『胸の火の

きゆること』とかいふの類。

三、活喩 無生物を生物と言ひ顯す、即ち『風は

狂ひ波は荒れたり』といふの類。

四、引喩 古語や古事を引いて今言わんとする所

を聯想せしむ、即ち孟子の語を引いて「我豈辯を好まんや、止むを得ざればなり」の類。

五、諷諭 當面の事を隠して、他の類似したる事を云ひて、其事を諷するを云ふ。

二に因縁を撰ぶに就き。

一、成る可く恠談を避けて實在的事實談を用ひよ

二、成る可く世俗的事實談を避けて碩德篤信者の美譚を用ひよ。

三、成る可く長くしい因縁を避けて簡單なるも

のを用ひよ。

又因縁を用ゆるに二つの心得あり、一には法説充分に説き顯しがたき時は、長き因縁を用ゆるも妨げなし、若し法説明了に説くを得る時は、簡單ならんことを要す。二には因縁は主として感情を與へ、兼て他の二點を具する故、法説中其分り惡き部分、及び疑問の起るべき所を、因縁を以て説く時は、分明に了解し且つ感興を起すことを得るなり。

四五段式

この五段式は法警縁の三を揃へて談ずるの法式也、餘程練磨の上にて談ぜざれば、啻に長談になるのみならず、統一を欠き、脈絡を失ふの恐れあり。是れ四部式の上に置く所以なり。さて法警縁結の四は前三分四部式に於て畧述するが如し、讚題に就て聊か述ん。

説教には何が故に讚題を要するかと云ふに、凡そ説教を大別すれば二種とす、一は未信者に信仰を起さしむるもの、二は已信者の信仰を強固ならしむるもの、乃ち經典祖録の中より、佛祖の金言を讚題として、自己の所説は己れ一人の私見にあらずして、佛祖の言を宣傳するものなりこの事を明にするにあり。併る時は、一には説教者の職務を明にし、二には説教者の言に一種の權威を得て未信者敬服し己信者益々確信の利益あり。委くは次の第七章に至つて之を述べん。

五變則式

變則とは三分四部五段の規則を守らず、最初序分を出すべき所へ正宗分を用ひ、譬喩かと思へば合法となり、合法かと思へば亦譬喩となり、正宗かと思へば結となり、主となり、事となり、流通となり、變換窮りなきを云ふ、然れども意味貫通して更に悖らず、宛も一條の糸を以て數十個の玉を貫き、轉々玉を轉ずるが如し、達者に非んば何ぞ之を能くせん筆舌以て形容しがたし。

己上四節も第二編の説教豫備科に至りて其概式を掲載すべし。

### 第二節 讚題の區別

説教は讚題の敷衍に外ならず、故に先づ心得べきは讚題の區別なり。

#### 一 連 讚 題

連讚題とは「正信偈」の如き長き讚題を、初より二句又は四句づゝ、數日續いて漸々に談ずるを云ふこの場合には、二句なり四句なり、それに就いて全文談じ、談じ難き時は其中談じやすき一句或は一字

を引き抜いて、其内へ前後の意味を含めて談ずべし。若し意味通じ難き時は、適切なる譬喩又は因縁を以て談すべし。又四句全文ありの儘に談ぜらるゝ時は其中は簡單なる譬喩又は因縁を加へて談すべし。若し譬喩のみにて意味通ずべき所へは、決して因縁を入るべからず。何故なれば、たゞ長談になるのみならず、因縁に聴衆の心奪われて、肝心なる法門の意味を忘るゝに至る。初心の時は、あの譬喩も面白しこの因縁も適當なりと、しらすゝ材料のみ多くして、遂に法門の意味通ぜざるこことなるべし。慎まざるべからず。

二 亂 讚 題

亂讚題とは、一席々々別文讚題とするを云ふ、この場合には、たゞ一席にて聴衆に満足を與へ、讚題の主意を説き盡ざるべからず、恚るときは、先づ適切なる因縁を考へて之に適合すべき讚題を用ひ、若し法門の餘意あらば譬喩を以て談すべし。要するに前節の連讚題は讚題より譬喩因縁を見立て、談じ、

この亂讚題は譬喩因縁より讚題を見立て、辯ず、是れ説教思考の秘訣。

三 一文の見渡し、一句の見込、一字の見立。

一文の見渡しとは、讚題全文を見渡しして、前後すべて談じ顯さねばならぬ時は、全文すべてに通ずる譬喩因縁を考ふべし。又一句の見込みとは、全文すべて談じがたき時は、其中の一句に見込を立て、前後の意味を一句に收め、この一句に適切なる譬喩因縁を撰んで辯ずべし。又一字の見立ての時は、一

文の中字眼を見立て、その一字の字註訓釋等より説き起し、譬喩因縁も亦一字の意味に合法して談ずるなり。この一節前に粗ほ述ると雖も、説教思考の肝要爰にあり、故に煩を厭はず重ねて之を述ぶ。

### 第三節 腹稿の注意

一 全分の草稿

初學壇に上らんこせば、先づ腹稿を作るべし。腹稿とは大工が家を建つるが如く、日頃書籍より得たる材料を組立てるを云ふ。これに全分の腹稿と略腹



稿この二法あり、先づ全分の腹稿とは之を組立てるに、最初は讚題より法説譬喩因縁等、或は四部或は五段に分ち、之を一の文章体に起草し、全部微細に書き記すをいふ。これを書き記して、其上度々添削訂正して、初めて一席の説教となるなり。之を能々暗誦して後ち壇に上るべし。この全分の腹稿自由に起草し得らるゝやうになれば、説教も亦自由に談ずることを得べし。

二 略 復 稿

この畧腹稿とは、所謂る導附けなる者にして、一席の説教の要點を簡單に摘みて個條書きするを云ふ初學追々昇達するに従つて三分四部等其梗概を導附けになし置き、其後の説教毎に之を取り出し考ふれば、前の導附けの未熟なることを知る乃ち又改めて取捨錯綜して導附けする時は、知らずく昇達し、取捨錯綜も自由になり、曩の導附けを見る毎に其未熟なることを知るに至る、是れ説教上達の一大要術なり。併るに初學の徒たゞ出放題に説き散らして、

この導附けへてもなさざるもの多し、その昇達せざるも亦宜なる哉。

#### 第四節 説教の二大區別

一は大堂向き、一は小堂向き是れなり。之を新聞の原稿に喩へんに、前者は論説的にして後者は雑報的なるべし。論説は正々堂々、段を分ち節を定め、規律整然、明快に論旨を徹底せしむるを云ふ。大堂に於て滿堂幾百千の聴衆を控へての説教亦然り、この種の説教は、豫て充分に腹案を設け、之を演ずる

に大聲を以てし、大舞臺に三分四部の規則を守り、譬喩因縁も緻密に亘らず、正々堂々聴衆をして呼吸をも續く能はざらしむるを要す。之に反して五間六間の小堂に、百名足らずの聴衆を相手とする場合は新聞の雑報的なるべし。雑報的とは見出しにて人目を惹き、千態萬狀百般の出來事を叙述して讀者をして倦まざらしむるを云ふ。この種の説教は、別に腹案を設けず、所謂臨機應變にて、小音にて小舞臺に高座上聴衆の顔附を見て、或は機を責め、或は法

を語り、突然因縁談に入り、俄然譬喩となり、千變萬化、聽者をして恍惚として口舌の中に翻弄せられしむるを云ふ。

更にこれを喩へんか、前者は舊大名の道中の如し、後者は彼の紙屑買ひに似たり。舊大名の道中たるや前驅あり御先供あり、輿あり御附あり、鎗持あり長持あり、正々堂々見物人をして肅然襟を正さしむ。古物行商は戸々を叩き、古金はなきやなしと云ふ、併らば紙屑はなきや、ありといへば忽ち直段の掛引

をなす。今説教にても小人数の時、機を責めて感ぜなしと見るや忽ち法を語り、適せりと見るや忽ち譬喩因縁を以て聽衆に満足を與ふるの類を云ふなり。

實際上説教には必ずこの二つの場合あり、若しこの二を兼ね得るならば説教家の上乘なりといへども若し併らざれば、前者は性來大聲の者の業にして、後者は小音の者に適す。又前者は初心の學び得べき流義にして、後者は老練家に非れば能わず、故に初心は先づ前者を標準として學び漸く熟達するを待ち

て後者をも習ふべし。

### 第五節 聴衆の機類

説教には先づ聴衆の機類を知ること要中の要なり。若し對機を知らずして法を説かんか、病根を知らずして藥を投じ、的を見ずして弓射る如し。併るに所對の機類たるや千差萬別なりと雖も、大要四人と見做すべし、一人は信者とし、一人は學者とし、一人は愚者とし、一人は誹謗者と見て談ずべし。

第一の信者に對しては、すべて言動共に丹誠を表

し、佛智の廣大なることを讃仰し、殊に超世の悲願攝取衆生の謂れを懇ろに述べ、簡單なる譬喩を以て報謝の心を勵ましむべし。

第二の學者に對しては前の學問の一章必要なり。須らく法門の規則を守り、經論釋の道理を分明に辨じ、聖淨二門自力他力の筋道正しく、疑問の餘地勿らしむるを要す。但し學者と雖も學理のみにては信を生じ難し、是れ曩きに心理學の必要なることを述べし所以なり。されば法門の理節を辨ずると、共に

感情の必要なることを忘るべからず。

第三の愚者に對しては、法門や道理にては了解し  
かたし、故に多くは譬喩因縁を以て談ずべし、但し  
法門を語らんご欲せば、よくよく和げて廻り遠きな  
きやふ、譬喩因縁を以て感覺を起し了解せしむるこ  
とに注意すべし。

第四の誹謗者に對しては決して敵對すべからず、  
和顔愛語、言々深切を盡し、又自法愛染の嫌ひなき  
やう、普通の學問にも亘りて、法門の道理ご文證ご

を適切に談ずべし、是れ亦感情に訴ふるごこの必要  
たるごことを忘るべからず、時機を見て典據正確なる  
因縁談を試むべし、一席の説教にて廻心懺悔せし例  
尠なからず。

斯の如く聽衆に四種の機類あれど、一時に四人を  
對機ごして一席の説教を試みんごこ、初心にては甚  
だ難かるべし、故に初は一席に信者のみ又は愚者の  
みを對機ごし、次の席に信者ご學者、又は愚者ご誹  
謗者ごを對手ごする用意あるべし、斯くて習練すれ

ば、遂には一席の中に四人を悉く對機として談ずる  
ことを得べきなり。

### 第六節 注意 數 件

一、引文の心得 凡て經論釋の文を引く時は、何經  
と經名を出さず、單に經にのたまわくと云ふべし  
論釋亦然り。亦世俗の書を引く時も、亦書名を出  
さず、或る道話に云くとか、又或る書に云くとか  
ふべし、是れ説教の古實なり。一一書物の名を擧  
げては、餘り學者めかすやうにて、或は聽衆の感

觸を害ふこともあるべし。又經を引く時は「ノ玉  
ハク」ごか「説カセタマヒタ」ごかいふ如き敬語  
を用ゐべし。論釋には「論に云く」「善導の云く」  
「釋に云く」ご云ふべし、是れ「御本書」の言曰云  
の格に據るなり。又茲に注意すべきは引文あまり  
繁く多きは、耳に立ち骨がましく聞はてわろし、  
唯私しなき證據、又は法を重んずる爲めに一二引  
くべし。事々しく「經に言く」「大師の曰く」なぞ  
ご大音に名のるもまた異なるものなり。又同じやう

なる類文をいくつも出すは六ヶ敷く聞ゆ、すべて自宗の教義を成立するには、他經他論を證に引くも可なり。安心を演るには自家の經釋の外は承引しがたきこと知るべし。

二、説教の席數 初心の中は説教の稿案其數餘り多きを望むべからず、先づ五席を限りとし、この五席を繰返しく鍛練し、抑揚頓挫任運自在に辯ぜらるゝまでは、決して餘を談ずべからず。若し同所にて數日開席すとも、右五席にて練磨すべし。

假令聽衆はまた例の説教かと思ふとも、自身は初めて的心得にて、意氣揚々として、決して耻ぢ恐るゝことあるべからず、傳へ聞く説教の大家某幼年の頃、某寺の小僧たりし時、偶ま一席の書法談を得て、毎夜下女下男夜業の時之を暗誦せしに、毎夜の事として下女下男も之を暗記し、また例のが始まつたかと思ふに至る、併るに怠りなく毎夜之を繰返し習ひけるに、音聲の遣い方、抑揚頓挫も自然と其法に契い、初め笑ひし者も終には覺ゆず

己が縫ふ針の運びも息め、恍惚こして傾聴するに至りしこそ、又音曲にても昔し名古屋に林歌坊といへる人あり、林歌の一曲に精神を込め、晝夜怠りなく鍛練し、遂に其妙に達して林歌坊の稱ありしこそ、例して知るべし。

三、参考書の撰擇 初學参考のため、勸鈔談録を購讀せんご欲せば、多數の書冊を望むべからず、名家の著書二三部を選び、之を熟讀玩味して、表紙の破るゝに至りて、初て説教の妙味を知るべし。

初心中に多數の談録を見る時は、彼れも是もご道具に迷うて、所謂一もごらず二もごらずの風情に陥るべし。

四、大堂の音聲 大堂の説教に二個の心得あり、一に大堂にて殊に群參なるごきは、如何に大聲なる者にても必ず音聲の疲るゝものなり。是れ思はず聲を張り調子の高くなる故なり。恚る時は強めて常の調子より一段卑く音聲を發すべし。尙又群集の人を廣く見渡して聲を發すべからず、自身の目



前五七人を相手として音聲を發すべし。併る時は自然と調子卑くなりて、法味を談し顯す故、聽衆も自ら耳を傾け心を止るに至りて、音聲堂内に満ちて、自由に談ずることを得る。二に談じ方細目に亘らず、讚題の意味を大摩訶に辨ずべし。歌も因縁も喩も種々取出して辨ずべからず、歌ならば一首を引き、譬喩因縁も一色を引合せ、最初辨じかけた法門を離さぬやうに談ずべし。已上三章に陳べ來れる趣き、よくよく熟讀玩味し

て後ち高座に昇るべし。但し是等の個條を心得たりとも、實地習練なき者は心得たる三分の一も言辨に顯し難し、是を「心に得て口に得ず」と云ふ、仍て已下段道に入らざる前に、未だ口に得ざる者の爲めに、例題を掲げ習練の豫科を設け以つて段道に入るの階梯となすべし。

## 第四章 説教の例題

この説教例題とは、昔の謂はゆる書法談なり。従前の説教大家は、最初は皆この書法談よりして其門に入りし者なり。されば是れ説教習練の豫科なりと謂ふべし。併るに今時の青年は多少學問もあり辨才もありて、書法談の如きは馬鹿々々しく思つて、最初より名談家を氣取る者多し、其言に云く、説教は熱心さへあれば必ず人をして感動せしむる者なり、

精神一到何事か成らざらんやと、夫れ然り豈夫れ然らんや、元より熱心も必要なりと雖も、熱心のみにて其目的は達すべからず、説教は一面より考ふれば一つの術なり、世の技術たる、繪畫にまれ習字にまれ如何に熱心なるも其法をしらずして昇達せんことすらも豈得べけんや、仍て今説教も熱心を以て其法に據り、實習練磨怠らざれば、平凡の事柄と雖も、必ず人を感じしむるに至るべし。希臘にて、或人が雄辯家の稱ある辯護士に訴訟の答辯を依頼したりける

に、其辯護士は原稿を示して「予は明日法廷に於いて此の如く論議するのである」と、其人それを讀んで「これは首肯し難き節多し、尙ほ改められたし」と云ふ。辯護士は笑つて「卿は讀みたまふが故に首肯し難きも、明日法廷にて之を聞きたまはゞ必ず首肯したまはん」と、果して其言の如くなりしと云ふ。今説教も其音聲の抑揚や口調の具合にて之を感じせしむることを得る、是れ其法を以て練磨研習せし結果と云ふべし。故に今練磨の順序として、説教の例題

を設け、之を豫科として漸次堂奥に昇らしめんことを

- 第一 三分式
- 二席

其 一

五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなり。(讚題)

各々よくこそ參詣せられた、如何に世は末代とは云いながら、彌陀の本願の花盛り、彼處では説教此處では示談、實に佛法の寶の山はこの事である、

併るに若しやこのたび未來の一大事を取り損じては無量永劫取り返しは出來ぬ故、性根を入れて大切に聽聞あらるゝやう。(序分)

さてこの一首の御和讃は、善導大師の御釋に據り御製作あらせられて、先づ初めに五濁惡世のわれらこそは、取りもなをさず今日在座の我れ人のこと、こそは物を限る言ばで、上代上智の善人なれば、何れの行も修せらるゝてあらうけれども、末代五濁の我々に限りては、何れの行も及びがたきあいだ、只

彌陀の本願信ずるより外に助かる道はないと云ふこと、次に金剛の信心ばかりにてこそは、金剛と云ふ金は水に入りても腐りもせず、火に入れても焼けもせず、ぬが金剛の金の徳である。今他方の信心も、煩惱の水に入りても腐りもせず、惡業の火に入れても焼もせず、三毒の煩惱はしばく起れども、まことの信心はかれらにもさへられず、顛倒の妄念は常にたねされども、更に未來の惡報をまねかず、この信心獲得するばかりにて、永く生死をすてはて、自然の淨

土にいたるなり蓮如上人は『御一代記聞書』の中に  
 『五濁惡世のわれらこそ金剛の信心ばかりにてなが  
 く生死をすてはて、自然の淨土にいたるなり、さて  
 くあらくをもしろやく』と御喜びあらせられ  
 た。ありがたしと云ふもなををろかなり、をもしろ  
 やくご喜ばるゝのが、信心決定の徳と申すもの。

(正流分)

いまこの信獲得の上からは、この世の日送り  
 は淨土参りの道中なれば、一日たりとも厭な顔付せ

ぬやうに、家内仲よく睦まじく、娑婆の御縁の盡き  
 次第、迷ひの境界跡に見て、光り耀く御淨土へ、屈  
 伸臂頃即生西方、屈けたる臂を伸さぬ間に、はや花  
 の臺の往生とは、何たる我身は仕合せそこ、存せら  
 れたであらうなら、持出す御禮は出来ねども、せめ  
 て貰ふた御六字を、行住座臥を選ばずに、稱へ上げ  
 ては南無阿彌陀佛。(流通分)

其二

一至つて堅きは石なり、至つて柔かなるは水なり

水よく石をうがつ、心源もし徹しなば、菩提の覺道なにごこか成ぜざらんといへる古き言はあり。

いかに不信なりとも、聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候あいだ必ず信をうべきなり。(讚題)

この御言は、御一代記聞書の中にある御言にして初めの古き言は、昔し音羽に明詮大徳といへる知識あり、若年の頃、南都元興寺にて學問修行をせられし處、性來魯鈍にして、更に上達の見込みなし、依て僧侶の望みを絶ち、夜に紛れて逃げ出さんこ、

山門まで來られた處、驟かに雷雨沛然として車軸を流す、據ろなく門の軒端に佇んで、何に心なく雨滴を見たるころ、下に切り石ありて、その雨滴の落る所大いに凹んで居る、之を見て明詮奮然としていはく、至つて堅きは石なり、至つて柔かなるは水なり、水よく石をうがつ、心源もし徹しなば菩提の覺道何事か成ぜざらん、我れ學問修行の上達せざるは全く精神の足らざるが故なりと、夫れより寺へ引返し、一心に修行せられたれば、遂に明詮大徳と末代

まで名を残す知識ちしきなられたとある。(叙事的序)

さていかに不信しんなりとも、聽聞きんを心に入れて申さば、御慈悲ごひにて候まうあいだ、必ず信しんをうべきなりとは心こころない石いしと水みづ、穿うがつてやろうの思おもひもなく、凹くぼめてほしいの願ねがひもない、併しかるに柔やわらかなる水みづにても常つねに怠たらず滴たれば、堅かたい石いしにも穴あながあく、今阿彌陀如來いまあみだにょらいと我々われとは、心こころない同士どうしではない『如來にょらいの作願さくがんをたづぬれば、苦惱くたうの衆生しゆじやうをすてずして廻向くわうを主しゆとしたまいて、大悲心だいひしんをば成就じやうじゆせり、』五劫思惟ごふしゆいの初はじめより

正覺成就しやうかくじやうじゆの今日こんにちまで、一度いちどは／＼の御念力ごねんりき、十劫已じゆじゆい來立らいだちづくみ待ち詫わびたもふ御慈悲ごひにて、逃にげる者ものさへ逃にげしたまはぬ親おやさまゆる、たゞ聽聞ちやうもんを心こころに入れて大事だいじ／＼の思おもひより、御慈悲ごひに近付ちかづき近ちかづけば、こちらの力ちからは叶かなわずとも、彼尊あなの御慈悲ごひが強つよき故ゆへ、必ず信しんを得うべきなり『安心決定鈔あんじんけつちやうせう』に『佛心ぶつしんといふは大慈悲だいひこれなり、佛心ぶつしんはわれらを愍念みんねんしたまふここ骨髄こつさいにこほりて、そみつきたまへり、たごへば火ひの炭すすにをこりつきたるがごこし、はなたんごするもは

なるべからず、攝取の心光われらをてらして、身よ  
り髓にさほる、心は三毒煩惱の心までも、佛の功德  
のそみつかぬところはなし、機法もごより一體なる  
ところを、南無阿彌陀佛といふなり』ご、この御言  
から頂いてみれば、是迄信心の頂かなんでは、彼尊  
の方の不調法ではない、全く私が親を知らずに迷ふ  
たのぢや。併るに今は彼尊の御慈悲に呼び起され、  
やうく御慈悲にふり向ひて、親のまごごが信せら  
れ、まごごの領解になられたら、この阿彌陀如來は

ふかく喜びまじくして、その御身より八萬四千の大  
きたる光明を放つて、この光明の中にその人を攝め  
置きたまい、如何に地獄に落んと思ふとも、我はか  
らひにては地獄にも落ちずして、極樂に參るべき身  
なるが故なりと仰せられた。(正宗分)

鋤鋤擔ふて行く人なら、田野へ趣く人たることは  
問はずして知る、網提さげて歩むものは、その漁り  
に趣くことは自ら知らるゝであろう。御慈悲頂いて  
念佛稱る人ならば、極樂參りの人たることは、問は



ずして知らるゝなり。併るに淨土參りの人たる者が  
 邪見憍慢の日送りしては、淨土參りの道中とは云は  
 れぬではないか、藥持ちたら藥の香い、酒を飲たら  
 酒の臭い、御慈悲を得たる者なれば御慈悲の香いは  
 せにやならぬ。成るだけ人にも情けをかけ。家内の  
 中にも慈悲の徳顯れ出で、和合となり、王法仁義の  
 守らるゝ活きた信心頂いて、活世界に活動し、稱名  
 勇みの御念佛、稱へ上げては南無阿彌陀佛。(流通分)

第二 四部式 二席

其 一

阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪  
 業のわれらたらんものつみはいかほごふかくとも  
 我を一心にたのまん衆生をば、かならずすすくふへ  
 しこ仰せられたり。(讚題)

一花開いて一天の春を知ると云ふ語がある。春が  
 來たかご廣く野山を探るには及ばぬ、我屋敷に一輪  
 の花が咲いたら、夫れで春の來たと云ふことをしる  
 と云ふ語である。今淨土參りの春をしらんご欲せば

廣く聖教を尋ぬるには及ばぬ、今の御勅命通りが信ぜられたら、夫れぞ往生淨土の春は來にけり喜ぶべし。(破題格序)

さてこの御言は、御文四帖目第九通疫癘の御文中にある御言にして、阿彌陀如來の御勅命を、如何なる愚かな者迄も、分り易く御述あらせられ、源ごは第十八願、近くは、善導大師の二河白道の御諭の中、西岸上の呼び聲を和げさせられた御言、約めて云べは南無阿彌陀佛の六字の勅命である。我をたの

めごは南無の二字、必ず救ふべしごは阿彌陀佛の四字の謂れ、我等がこの度び無始已來の初つ事に、迷の境界をあごにして、眞實報土の往生を遂るには、この御勅命の聞へるご聞へぬごのたゞこの一事なり誰人も坐毎にこの御勅命は聞くと雖も聞きやうに大いに差別がある。(主)

主人殺しの大罪人(この一言突然大罪にて發せ)刑場に引きすへられ、今や首の飛んごする時、數多の見物人は手に汗握りて居る處へ、御上の役人早馬にて駈け來り

悪人暫く待つた、この度御上に於て御法事が勤り、  
大赦を行はせらるゝに付き、其罪人御助けなり、  
ご云ふ呼聲は、大勢の見物人も皆一同に之を聞く、  
併るに見物人の聞き心ろは何ぞ聞いた、御慈悲の御  
上さまご迄は思へごも、助けて下されの思ひも起ら  
ず、飛び立つほどの喜びもない、御助けの聲を聞き  
ながら、助けて下されの思ひも起らず、飛び立つほ  
ごの喜びの起らぬ道理はないと思へごも、ごうして  
も起らぬ、起らぬ筈ぢや、死ぬる機遣ひのない機へ

聞く故じや、併るに大勢の中で、劔の下の罪人一人  
は、耳に御助けの聲の聞へるなり、聞へたなりが腹  
あり合ひ助けて下されの思ひより外はない。その助  
けて下されの思ひには、やれ嬉しや難有やの喜びは  
一人手に起る、嬉しがるには及ばぬ、喜ぶには及ば  
ぬご云ふても、嬉しさより外はない。今も丁度その  
如く、たのむばかりで助くるの彌陀の勅命聞きなが  
ら、聞いてもく嬉しうない、信ぜられぬは何故な  
ら、今日や明日には死なぬつもりの見物人で聞く故

に、いつ迄たつても本願が信ぜられぬ。併るに落る地金の知られた胸へ、案じるには及ばぬ歎くには及ばぬ、オゾイ心ろもシブトイさまも、見抜いて立つた本願故、阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪はいかほごふかくとも、我を一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべしと仰せられたり、この本願招喚の呼ひ聲が、心の底に届くなり、届いたなりが世話入らずに助けたまへの思ひより外はない、喜ぶには及ばぬと仰せ

られても、喜ばにや居られぬではないか。(事)

恚く勅命が聞き開かれ、實この信の行者なら、天は地となり地は天となり、大海乾く例しはあろうとも、往生ばかりは間違ひない。水に入れば濡れるが約束、火に當れば焼るが約束、鏡に向へば寫るが約束、彌陀をたのめば助かるが若不生者の御約束、善いも悪いももう暫らく、難儀な娑婆も僅かの間だ、追付け命ち終るなり、黄金ね花咲く御淨土へ、光明傳への往生とは、何にたる我身は仕合せぞこ、存ぜ

られたであらうなら、廣大深重の御大恩仰ぎ上げては南無阿彌陀佛。(結)

其二

一つ佛法には無我ご仰せられ候、われごおもふことはいさゝかあるまじきことなり、われはわろしごをもふ人なし、これ聖人の御罰なりご御詞はに候、他方の御すゝめにて候、ゆめくわれごいふことあるまじく候、無我ごいふこと前住上人も度々仰せられ候。(讚題)

拙僧は何國の者にて、當地へは初めてのこと、各々方ごはこの世に於ては初對面にてあれど、過去萬々生の間だには、何れの世何れの國にて面會せしことあるやもしれぬ、世の諺にも、袖摺り合ふも多生の縁ご云ふ、況んや無上の法を聞せるのも聞くも苟且めの因縁ごは思われぬ故、大切に聽聞あらるゝやう。(談話的序)

さて只今の讚題は、御一代記聞書の中にある御言に於て、初に佛法は無我にて候ごあつて、眞宗は無

我にて候ご仰せられず、廣く佛法は無我ご仰せられたは、何れの宗旨に於ても、悟りの境界に至りては皆な無我ご云ふより外はない、修行をするのも、坐禪觀念をするのも、畢竟するに無我の境界に至るを目的とするのである、眞宗に於てもいよく他力の妙味のしられた處は、無我ご云ふより外はない『御式文』に『至心信樂已れを忘れて速かに無行不成の願海に歸す』とは、この無我の有様を御述べあらせられたもの、當今の言ばで直覺ご云ふことばがある、

奇麗な花を詠めたとき、私は今奇麗な花を眺めて居るご思ふては居らぬ、否な奇麗な花ご思ふて居ながら、その思ひぶりに氣がつかぬ、何故なれば花の奇麗なに見惚れて仕舞うて、已れを忘れるが故なり。今後生の大事ご思ふ處へ、其機見込んで助るごの彌陀の仰せが聞へるなり、已れ忘れて助けたまへごたのめごも、私しは今たのんで居るごは思ひはせぬ、否なたのんで居ながら、そのたのみぶりに機がつかぬなり。何故なればあまりの御慈悲に見惚れて仕舞

ひ、思ふ思わぬに目がつかぬ、爰を至心信樂已れを  
 忘るゝといふ。さて餘宗の無我は自力にて觀念修行  
 して到らんごし、眞宗は他力にて有我の儘にて無我  
 の妙境に至るのである。(主)

ある伽話に、日の神と風の神と互いに力ら自慢をし  
 た處ろ、丁度下界の方に旅人がマントを着て寒そふ  
 に歩いて居る。日の神が風の神に『貴殿もし力らあ  
 らばあの旅人のマントを脱がしめよ』と命じたれば  
 風の神承知して、元より得意の大風を吹かして、脱

が令んごしたれば、旅人驚いてマントを堅く捕らへ  
 て中々容易に放さない。そこで今度は日の神が我力  
 らを見よご、非常の熱氣を發して、彼旅人にあぶせ  
 たらば、急に熱くなりて汗をだら／＼流し、是れは  
 堪らぬご遂にマントはをろかシャツ迄脱いでしまつ  
 たごある(譬)今自力にて有我のマントを脱んごすれ  
 ば、却つて之に執着して、容易にこれぬ。併るに他  
 力にては有我のマントを着ながら、聽聞の道を経て  
 行く中に、佛けの熱き慈光に温められて、いつの間

にかは有我がマントも我執のシヤツ迄脱いでしもう  
 爰を只今の御言に他力の御すゝめにて候ゆめくわ  
 れごいふことあるまじく候ご仰せられた。(合法)(事)  
 恚く無我の安心に住せられた上からは、平日の日暮  
 しにも、無我の徳が顯はれねばならぬ。他人ご衝突  
 を起すのも、家内の和合を壊るのも、もごこの我執  
 より起る。信の上からは、觸光柔輒の利益あり、蓮  
 如上人は「信の上からは人に物をあらくしく云ふ  
 な」この御誠めもあれば、我慢を慎み堪忍を守り、

家内仲よく睦く、淨土參りの道中そこ心得て、稱名  
 勇みの御念佛、稱へ上げては南無阿彌陀佛。(結)

第三 五段式 一席

祖師聖人御相傳一流ノ肝要ハタゞコノ信心ヒトツ  
 ニカキレリ。コレヲシラザルヲモテ他門トシユレ  
 ナシレルヲモテ眞宗ノシルシトス。(讚題)

「聲なくばいかにそれごはしられまじ雪ふりかゝる  
 葦原の鷺」この御歌は御開山聖人越後國へ御流罪の  
 砌、巨多か濱へ御着あそばされ、頃しも冬の雪の中



葦原へ降り積る雪の中より、白鷺のギヤツと一聲鳴  
て飛び立つを御覽あそばされ、雪も白く鷺も白し、  
何れが雪何れが鷺と見分けはつかねども、一聲鳴た  
ので雪と鷺との見分けがついたこの御歌。今も一堂  
へ集りた参詣人、何れも肩絹帽子手には珠數、何れ  
が信者やら不信者やら見分けはつかねども、眞實信  
心を獲得したる人は、かならず口にもいだし又色に  
もそのすがたはみゆるなりと、たゞ勇みの念佛の聲  
の擧るを見て、あれこそ信心決定の行者なりと想像

するここが出来、併ればこの中にも、信不信即ち  
他門と眞宗との差別あるべし。皆人一同にこれをし  
るを以つて眞宗のしるしとするの同行になりたきも  
のなり。(法説中ノ序破題格)

さて今この讚題は、御文二帖目第三通三ヶ條の御  
文の中にある御言ばにして、當流に其名をかけたる  
人の中に於て、これをしる人ごこれをしらざる人ご  
即ち他門と眞宗との差別あるこの嚴しき御異見、こ  
れをこそ祖師聖人御相傳一流の肝要たる他力信心の

ここ、しらざる人とは異解異安心の人、人は勿論のここ、  
肩絹帽子手には珠數、立派な佛壇安置して、參詣供  
養の足手をはこび、口には常に念佛して、相たも名  
前も眞宗でも、この信心の獲得せずば、極樂には往  
生せずして、無間地獄に墮在すべきものなりと、氣  
の毒ながらそれは他門他宗であるこの御誠め、登に  
迫りて佛壇は四分板にて打付け箱、土器の佛器に竹  
花筒、打敷一枚買ひかねて、肩絹帽子は破れても、  
胸に信心だにあるものなら、それこそ眞宗のしるし

であること仰せらるゝ。さてたゞ今祖師聖人御相傳一  
流の肝要はたゞこの信心ひとつにかぎれりとは、無  
信單行の念佛を選ばせられて、元祖法然上人の涅槃  
の城ここには信を以て能入とするの思召しを傳へさせ  
られたもの決して念佛を嫌ひたもふに非ず、當流に  
は信心正因稱名報恩と云うて、往生の業事成辨は信  
の一念にありとし、口に顯はれた稱名は、佛恩報謝  
の報恩行と云ふ。併るに信心正因なるが故に、報謝  
の稱名はありてもなくてもよいと云ふものに非ず、

又如何に念佛を勵めばこて、信心なくんば決して報  
 土往生はかなふべからず、故に「御本書信卷」には  
 『眞實の信心には必らず名號を具す名號には必ずし  
 も願力の信心は具せざるなり』と仰せられ、又「末  
 燈鈔」には「信心ありとも名號をこなへざらんは詮な  
 く候、又一向名號をこなふとも信心あさくば往生し  
 がたく候」も仰せらるゝ。故に信は一念に生るこ  
 しりて、行は一形に勵むべし。(法説)

無信單行の念佛は、繼母を呼ぶが如し。他方信心

の上の念佛は、眞實の母を呼ぶ如し。繼母を呼ぶは  
 朝から晩までチツカサン／＼と、チツカサンの名の  
 減るほご呼んでも、心の内は惡まれはせまいか、叱  
 られはせまいかの隔て心がある。自力の念佛は何ほ  
 ご稱へても、助けて貰へるか貰へまいか、參らして  
 貰へやふか貰へまいかの隔て心がある。眞實の母を  
 呼ぶ時は、御機嫌取て呼びづめにはせぬ、折々オツ  
 カサンご呼ぶ呼び心には、惡まれやふか叱られはせ  
 まいかの隔て心はさら／＼ない、たゞ戀しさなつか

しさの外はない、親の方にも隔て心はさらにない、  
 タ、可愛さの思ひより外はない。今他方の念佛も、  
 稱へづめには出来ねども、忘れた中よりふつと思ひ  
 出して稱ふる稱へ心は、助けて貰へやふか貰へまい  
 かの隔て心はさら／＼ない。たゞ戀しさなつかしさ  
 頼み力らになるの思ひより外はない。如來の方にも  
 隔て心はましまさぬ。爰の所を善導大師は、彼此三  
 業不相捨離と、衆生の三業、彌陀の三業と一體にな  
 るはこの味ひである。(譬喩並合法)

昔し南都の東大寺に良辨僧正といへる大徳あり。  
 御生國は近州志賀の御生れにして、母人觀音に祈り  
 て御生れなされた、併るに二歳の時、母人桑を摘む  
 ごと、兒を樹の陰に置きしに、何れともなく大鷲來  
 りて、今の小兒を捉へて空中に揚る。母人は驚き悲  
 み鷲の行く方に追ひ行きしも、遂に見失うてしまふ  
 た併れども狂氣の如くなりて家に歸らず、諸方を尋  
 ね廻る。其頃南都東大寺に義淵僧正といへる高僧あ  
 り、數多の御弟子を引きつれて、春日の神祠に參詣

したもふ。件の驚、兒を捉へて野に居て食んこせし處、僧正を見て驚いて兒を置いて逃げ去る。僧正不愍に思召し、この小兒を率れ歸り、養育したもふ。この兒五歳に及んで、學問を教ゆるに、一を聞いて十を知る。初め法相宗を學び、中年にして華嚴の奥旨を究め、遂に義淵僧正の後を繼ぐ、聖武天皇深く崇敬を加へ、僧正に補す。今の東大寺の大佛は、この良辨僧正の勸進なり。然るに母は兒を尋ねて、山川を跋涉すること三十餘年、遂に尋ね遇はずして、な

くく故郷に歸らんこし、淀川を上る。たましく船中の人語りて云ふやう、世には奇なることもあるものかな、南都東大寺の良辨僧正は、年纔かに三十餘歳、學徳世に勝れて、聖武帝の師匠となる。昔し東大寺の義淵僧正、驚の小兒を捉へて來るを取て養育し、漸く成長して、この名僧となるこ、母之を聞て大に驚き、定めて我子ならんこ、急に南都に往いて潜かに寺僧に遇ひ、この事を語り、是非に僧正にあはんこ乞ふ。寺僧云ふ、僧正は位貴く徳高し、汝ち

如き賤婦の容易に面會はなしがたし。若し強いてこの事を僧正に申し上んごせば、其事を札に書て僧正の出る時を待ち路の傍らに立て置けご、母教への如くす、僧正春日の祠に詣する時、札を見て輿を止めしめ、母を呼で委細を問ふ。母實を告ぐ。僧正云く我師義淵かねて我に語るごご今母の語の如し、我も亦母に遇はんごごを願ふごご晝夜忘れず、今逢ふごごを得たるごご喜びにたへず、併れごも世には似たるごご甚だ多し、若し言ふ如くならば、何にか證據

ありやご、母泣いて云く、我れ昔し子なし、観音に祈りて公を生む、故に一吋一分の大悲の像を刻みて兒の頸にかく。驚兒を捉む時、像なを頸にかけありご。僧正之を聞いて嗚咽涕泣して云く、我れ七歳の時、師我れに観音の小像を授けて云く、我れ汝ちを得し時、この像汝ちの頸にかゝる、恐らくは父母之を付するなるべし、汝ち父母をしらず、之を見るごご父母の如くせよご、其後この像を奉持して體を離さず、併らば貴女は實に我母なりご、懐ろより像を

出して母に示す、母之を見て人目も忘れ大聲擧げて喜び泣れたとある。「元亨釋書」(因縁)

思へば今日の我等も、无始已來煩惱の鷲に捉へられ、展轉五道憂畏勤苦と、三界六道の野山に誘われ苦みに苦みを重ね、迷ひに迷うて今始めて人界の野に出で、フツト善知識に拾ひ上げられ、朝な夕なの御養育にて、最勝人希有人とまでほめらるゝ大出世、追付け淨土で親子對面の其時は、實の親子の證據はと云へば、胸に頂た他力の信心、切ても切れぬ

親子の證據。(合法)

これをしれるをもつて眞宗のしるしとするなり、珠數や帽子がしるしじやない。たごひ牛盜人は云はることも、相たや形ちもしるしじやない。心の中に頂いた信心一つが、實なら。夫ぞ眞宗のしるしなり。この信力一つにて、三祇を一念に飛び越ねて、追付け淨土に參るなり。大悲の如來は御慈悲の御手をのべたまひ、善哉々々よくこそ來たぞ、汝ちを待つこと三十年や五十年ではなかりしぞ、苟且ながら

十劫已來、待かねたご御聲もくもりての御喜び、参  
 た行者は躍り上り、歡喜の涙せきあへず、泣いて喜  
 ぶ仕合せは、遠いころではないほごに、日々の渡世  
 も報謝の資糧、妻子眷屬も浄土の道づれ、日夜に近  
 づく浄土を樂み、勤忍世界ご心得て、心を慎み身を  
 たしなみ、念佛もろこも近づく浄土を待受るが何よ  
 り肝要。(結勸)

第四 變則式 一席

抑人間界の老少不定のころを思ふにつけても、

いかなる病をうけてか死せんや、かゝる世の中  
 の風情なれば、一日も片時もいそぎて、信心決  
 定して、今度の往生極樂を一定して、其後人間  
 のありさまにまかせて、世をすこすべきころ肝  
 要なりと、みなくころうへし。

(讚題御文四帖目十三通)

某驛にて汽車に乗らんご駈けつけし所、時間を誤  
 り、已に發車せんごする一刹那、倉皇で切符を求め  
 辛うじて乗ることを得たるも、一分の差にて乗りを



くる、所であつた。車中つらく考るに、説教の席は宛も停車場で鈴を振つて發車を告げ乗客を促すが如くちや。聖徳太子は「いそげ人。彌陀の御船のやふ世に、乗りをくれなばいつか渡らん」ご詠ませられ「御文」には「出る息は入るをまたぬならひ」ごも又「いそぎて安心決定して浄土の往生を願ふべきものなり」ごも仰せられて、座毎く、いそげくの御催促、一分違うても乗り後れる如く、若しやこの坐で頂かれず、歸り路にて石に蹉き、ころり

ご命ち終りたら、ハヤ未來の一大事を取り損ぜねばならぬ。この世の瀛車は萬一乗り損じても、次の列車に乗るばかりで、一大事に關するご云ふごはなけれごも、未來の大事は一息つがざれば千歳永くゆくご、今度取り損じては、無量永劫取り返しはならぬ故「一日も片時もいそぎて、信心決定して、今度の往生を一定せよ」ご仰せらるゝ。瀛車に乗るには如何なる機械で動くやら、如何なる工合ひで走るやら、機械や工合ひは知らねごも、乗り込む一つで行

かるゝご知つて乗るであらう、今もこんな凡夫が淨土へ参りて佛になるは、如何なる機械でならるゝやら、如何なる工合で参れるやら、そんなことはしらねごも、助けたまへご乗り込む一つで、参らせて貰ふが南無阿彌陀佛の汽車の徳である。又車中にて乘客を見るに、士族あり農民あり、僧侶あり商人あり草鞋ばきあり草履ばきあり、木履ばきあり靴ばきあり、男女貴賤區々なれごも、機關車一つの働きで、同一軌道を走るを見る。今も上は龍樹天親の二菩薩

より、下は惡逆の凡夫迄、同一念佛無別道故と、智者聖者の靴ばきも、十惡五逆の泥足も、五障三從の草鞋がけ、智慧の眼この盲いたる盲人同様の者迄も助けたまへご乗り込めば、南無阿彌陀佛の機關車一つの働きのにて、無別道故と一筋道、外へは行かぬ間違なく、西方淨土と決定の出來たのが、信心決定の相たご申すもの。切符求むるその時は、時間が迫りて居た故に、その切符改る暇はなかつた。併るに乗り込むでよく、改めて見れば、某驛より某驛迄と

書いてありた、今も一念歸命ねんきみまうのその時は、信樂開發しんげうかいほつの時尅じこく。二字やら四字やら覺たはへなし、併しかるに本願ほんぐわんに乗り込のこでよくく改あらためて見みれば、南無なむの二字じの乗のり場ばより、阿彌陀佛あみだぶつの四字じの御助おたすけ迄まで、一念歸命ねんきみまうのその時ときに、残のこらず揃そろふて頂いたいたが、今度こゝの往生極樂わうじやうごくらくを一定ていした一念端ねんたんてき的てきの相すがたである。さて京都きやうこを目的もくとして氣車きしゃに乘のり込こむだなら、大津迄おほつまでの道みちは入用いりやうにはなし、入用いりやうになき故ゆへ京都迄きやうこまで飛とんで行く譯わけには行くまい、是非ぜひも其道そのみちを通とおらねばならぬ。若もしレール一

間切けんきれて居をても行くことはならぬ。今も淨土參りじやうそまみご目的もくを立たつた故ゆへ、この世よに用事やうじはないと云いつて、直ただちに淨土じやうそへ飛とんで行く譯わけにはゆかぬ。五年十年此世ねんねんこのよに生いき存ぞんへて居をる内うちは、淨土參りじやうそまみの道中だうちゆう故ゆへ、是非ぜひもこの世よの道みちは踏ふみはずさぬやうに通とおらねばならぬ一日いちにちにても人間にんげんの道みちにはづれては、淨土參りじやうそまみの道中だうちゆうごは云いわれぬ。依よつて只今ただいまの御言おごんごに、その後人間のちのちのにんげんのありさまにまかせて世よをすごすべきこと肝要かんやうなりとみななく、こゝろうべしと仰あやせられた。是これを二諦相依たいていあひの宗教しうけうと云いふ。先まづ、

### 第五章 説教の階段

#### 段道 十段

説教を習練するに、最も必要なるは、現に己が技倆の如何なる地位にあるかを知るこそこれなり。若し己が熟達の階段を知らざれば、徒に驕慢の巔に登りて、早く大家を氣取り、竟に大成すること能はざるべし。世にドンダリの脊較への如き布教家多くして、拔群の域に達するもの尠きは是に由る、故に今

聊か古來の口傳を潤飾するに、自己の實驗を以てし初學の爲め、説教の階級を假りに十段に分別して、實地に就て勝劣等差を知らしめんことす。

而も豫め此に注意すべきことあり。即ちこの十段の中、例へば二段の地位に在る者は、次階三段の地位に進まんことを期すべし。決して五段六段を望むべからず。未だ二三段にも至らざる者が、八九段の説教を聞いて直ちに其通りを辯せんことするも、言語思考等未熟にして、却つて識者に笑われ聽者に嘲ら